
白い女

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い女

【Nコード】

N2592E

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

ふとした瞬間、彼女は望の視界に入る。いつも一瞬で、消えてなくなる彼女の事を、望は白い女と呼んでいた……。

プロローグ（前書き）

この小説は、エンキド様主催の、小説大会投稿作です。

プロローグ

間に合わなかった。

右足は、しっかりとブレーキを踏みしめている。心臓の鼓動が、短いリズムを刻む。耳障りな音が聞えていた。それが、自分の呼吸音だということに、彼は気づいていなかった。

否、気づく余裕もなかった。

彼は、ハンドルを握る手を離し、シートベルトを外した。ドアを開け、車外へ出る。酷い雨だった。ただでさえ暗い夜道の視界を、よりいっそう悪くしている原因だった。

ゆっくりと、彼は歩いた。

先ほどの光景が、どうか嘘でありますようにと願いながら。

だが、やはり、それは現実であった。

痛いほどに激しく降り続く雨は、アスファルトに覆われた車道を、浅い川のように排水溝に向かって流れていく。その流れの中に、赤い色が見えた。その赤い色を、流れとは逆に辿っていく。車のヘッドライトの灯りが微かに届く範囲に、それは横たわっていた。女性だった。彼は息を飲んだ。やはり、彼は、人を車で轢いてしまったのだ。彼女の頭部から、赤い色の液体が、雨と一緒に流れていく。

殺してしまった。

彼の脳裏にそんな言葉が過ぎる。せつかく、就職先も決まり、これからというときに、何故こんなことになる？ 彼の頭に浮かんだ言葉はそれだった。

彼は辺りを見回す。誰も居ない。もともとは人通りの少ない道だ。しかも深夜近く。この雨の中、誰が横断歩道を渡っている人がいると思うだろうか？ 少し目を逸らしただけじゃないか。この女だって、車が来た事ぐらい気づいていたはずだ。こっちは灯りをつけていたんだ。自分は悪くない。こんなことで、人生終わるなんて

真つ平だ。

彼は、決めた。

辺りを見回し、誰もいないことを確かめると、踵を返した。その時、降りしきる雨音以外に、別の音が混じった。人の呻き声のような音。彼は、ついそちらを向いてしまう。

横たわる女の向こう側で、小さな黒い影が動いた。

彼は、驚いて身を反らす。小さな影は、ゆっくりと動き、彼女のそばへ這いずるようにやってきた。

小さな子どもだった。小学校に入っているかいないかくらいの、小さな子ども。その子どもが、女を呼ぶ。お母さんと。もちろん女は答えない。車のヘッドライトの光が届く範囲から少し遠いせいで、子どもの顔はよく見えなかった。

その時、稲妻が走った。

目が合った。たった一瞬の光の中で。彼の目に、小さな子どもの顔が映ったのだ。彼は恐怖を覚えた。雷鳴が遠く聞える。子どもが立ち上がるうとしたのが分かった。彼は今度こそ踵を返し、雨に濡れそぼった体を車内に入れた。シートベルトもせずに、ハンドブレーキを外すと、ギアをドライブにし、アクセルを踏み込んだ。

一週間後。新聞に、轢き逃げの記事が載った。

『親子轢き逃げ犯。自殺か？ 崖から転落死』

そんな見出しの記事だった。

第一章 白い女

彼女はふとした瞬間、望の視界に入る。それは、友人とともに帰宅する途中の道端であつたり、何気なく見た窓の外だつたりした。

しかし、彼女を見たとき知覚した時には、彼女の姿は消え失せているのだ。それでも、望が彼女を彼女だと知覚しうるのは、彼女が異質な存在だからだと、望は思っている。普通なら見過ごすような一瞬の隙に視界に入り込み、鮮明な印象を残して消えていく。

「おい、吾桑^{あそつ}。吾桑つてば」

呼ばれて、声の主を見る。望に声をかけたのは、クラスメートの井上晴大だつた。井上は、ご飯粒のついた箸を、望の顔の前につきつけた。

「おまえ、何ぼうつとしてんだよ。俺の話聞いてたか？」

聞かれて、望は首を傾げた。

「ごめん。まったく聞いてなかった」

素直に質問に答えたつもりだったが、井上は望の答えにがっくりと肩を落とした。それを見ていた友人が、可笑しそうに笑いながら、井上の肩を叩く。

「おい、気にすんな。こいつは昔からこうだから。なあ、吾桑」

友人、国立和也^{くにたちかずや}は望に同意を求める。望はまたも首を傾げた。女性的な可愛らしい顔立ちの望に、この仕草はよく似合う。とても、男子高校生には見えない。身体の線も細く、中性的な容姿である。

「そういえば、何でここにいるんだっけ？」

望が頭に過ぎった疑問を口にする、国立と井上は互いに顔を見合わせて、大きな溜息をついた。

「何？ 溜息ついて」

望が聞くと、大げさに溜息をついた際に少しずれた眼鏡をもとの位置に戻しながら、国立が言った。

「おまえな。今、自分がどこで何してるか分かってるか？」

聞かれて、望は辺りを見回した。春の暖かい日差しが、三人に降りそそいでいる。見上げると、青い空が広がっていた。と、いうことは屋内ではない。周りは柵で囲まれている。その先に見えるのは、空だ。

ああ。そういうば、井上が屋上で飯食おうって言ってたっけ。望はそう思ってた井上と、国立に視線を向けた。

「それで二人とも弁当食べてたんだ」

一瞬二人の顔が呆けたように見えた。次いで井上が、ほとんど中身のなくなった弁当箱を床に置く。そして、立ち上がった。

「おまえ、何がそれでだ。つつかおまえは何だ？ さっきの国立の質問にちつとも答えてねえじゃん。天然か？ おまえは天然なのか」

「まあまあ。落ち着けよ井上。こいつと付き合っていこうと思ったら、こんなことでいちいち腹立てたら身がもたねえぞ」

国立の言葉に望が頷く。

「そうそう。いつものことだから」

「って、おまえが言うな」

脳の血管が切れるのではないかと心配になるくらいの勢いで、井上はつつこんだ。

望たちが通う私立清廉学園は、中高一貫校である。井上は、望と国立のように中等部からの持ち上がり組みではなく、編入組みだった。そのため、望が周りからなんと呼ばれているのか知らなかったのだ。同じクラスになってまだ一週間である。

国立は、井上のブレザーを片手で掴んで無理やり座らせると、望に問いかけた。

「おい、また見えたのか？ 白い女」

「何だよ白い女って。怪談か」

心なしに青ざめた顔で、井上が問いを重ねる。望はふいに、自分も食事をしなければならぬことを思い出して、持っていた弁当箱の蓋を開けた。

「ご飯食べるの忘れてたよ」

望はいただきますと手を合わせて、食事を始めた。しばらくそれを眺めていた井上は、国立を見た。

「……おい、国立。こいつ殴っていいか」

真顔で、望を指差す井上だった。国立が口を開こうとしたが、望の声がそれを遮った。

「ついさっき、見えたんだ。白い女」

望の言葉に、指差していた手を下して、井上が口を開く。

「し、白い女って何だよ。幽霊か？」

「何だよ、井上。おまえ幽霊怖いのか？ なっさけねえな」

青ざめた顔の井上を、国立がからかう。井上が拳を振り上げて、国立を軽く殴ろうとした時、また望が声を上げた。

「幽霊かどうかは分からないんだ。小さい頃からたまに、僕の視界に入ってくる。いつも白い帽子に、白い半袖のワンピースを着てるんだ、その女の人。でも顔は分からない。いつも一瞬しか目に映らないから」

「へ、へえ」

国立ちを殴る気をなくしたのだろう。手を引っ込めて、引きつった声を上げた井上に、国立が補足する。

「吾桑と俺はその女を白い女って呼んでるんだよ。でも、残念ながら俺は見たことない。一回見てみたいんだけどな」

物好きなど、言わんばかりに井上は顔を顰めて、国立を見ている。国立は、眼鏡の似合う秀麗な顔に笑みを乗せた。井上の肩を叩く。

「残念だったな、井上。吾桑と名簿順が前後になったのも何かの縁だ。これからおまえにも、こいつのお守りしてもらおうから。逃がさんぞ」

そう言つて、国立は井上から望に視線を移す。その視線を追つて、井上も望に顔を向けた。望が気づいて顔を上げる。

「何？ ああ、まだお腹空いてるのか？ ならこれ上げる」

全く井上と国立の会話を聞いていなかったらしい望は、食べてい

た弁当を差し出した。これだけで足りるのか？ と問いたくなるほどの、小さな弁当箱だ。井上なら、一分もあれば食べ終わるだろう。その弁当箱の中身はまだ半分以上も残っていた。

「おい、ぜんぜん食ってねえじゃん。自分で食べよ」

「吾桑は昔から、食に欲がないよな」

呆れ声で国立が言った。望は苦笑する。

「いや、食べてもいいんだけど、もうすぐ……」

望の声を遮るように、屋上に大きな音が響いた。誰かが、屋上に通じるドアを開けたのだ。余りにも勢いがありすぎて、ドアが壁にぶつかったらしい。

三人一斉に、ドアの方を見た。そこには、クラス委員長の桐野理香子がいた。走って階段を上がってきたのだろうか。肩で息をしている。桐野は何故か三人を、否、望を睨みつけた。

「やっと思つけた。吾桑。あんた何でここにいるの？」

「食事行こうって誘われたから？」

語尾を上げて答えると、桐野が眉間に皺を寄せた。

「語尾を上げるな、この不思議ちゃんがつ。朝礼で、委員長と副委員長は昼休憩に職員室へ来いって言われたでしょうが。副委員長のあんたが、こんなところでのうのとご飯食べてるんじゃないわよ。こっちは、あんた搜して校舎中走り回ったんだから」

そう言つて、また肩で息をする桐野だった。ちなみに、不思議ちゃんとは、望の隠れたあだ名だ。中学からの持ち上がり組みは、望のことをこう呼んでいる。今のように、本人に直接よびかけるのは珍しいが。

望はよっころしょと言つて立ち上がり、井上と国立を振り返った。

「ね、食べられなかったでしょう。じゃあ行ってくる。お弁当箱、僕の机に置いてね」

そう言つて望は、二人に手を振ると、桐野と一緒に屋上を後にした。

残された井上と国立は、顔を見合わせる。

「なあ、国立。あいつ、分かっててやってるのか？ 最後の台詞。あいつ桐野が来るの分かってたみたいじゃないか」

井上の問いに、国立は顔を顰めた。

「俺に聞くな。あいつの思考回路は俺にも読めん。余り深く考えても疲れるだけだぞ。まあ、悪い奴じゃないから」

そう言って、国立ちは望の残していった弁当箱を手にとると、入っていた鶏のから揚げをつまんで口に入れた。

「お、美味い」

「マジで。俺にもくれ」

二人で望の弁当を空にするのに、一分もかからなかった。

屋上から四階まで続く階段は静かだった。今この階段を歩いているのは、望と桐野だけだ。余り掃除がされていないのか、階段の隅には埃が溜まっていた。職員室は一階だ。一階まで下りるのは面倒くさいなと望が思った時、桐野が何かを望に差し出した。

「はい、これ」

望はそれを無意識に受け取り、手にしたものに視線を落とした。

「サンドイッチ……」

「お弁当、ほとんど食べてなかったんでしょ？ 吾桑はいつもぼうつとしてるから、食事するのも遅いもんね」

足早に階段を下りながら、桐野が言う。望はその背に声をかけた。

「桐野さんは？」

「私は、あんたを捜しながら食べたわよ」

「そう、ありがとう。優しいんだね。桐野さん」

望が桐野に礼を言くと、突然桐野が足を止めて振り返った。危うくぶつかりそうになる。

「急に立ち止まったら危な……」

「別に優しいわけじゃないから。吾桑が余りにもスローペースだから」

ら、その、なんて言うか、とりあえず、あんたにだけ優しいわけじゃないから」

何だかよく分からないが、凄い勢いでまくし立てられて、望は素直に頷いた。

「分かった。で、これ食べていい？」

笑顔で確認すると、怒鳴った勢いで顔を真っ赤にしていた桐野の顔が、より一層赤くなった。

「あ、当たり前でしょ。そのために渡したの」

そう言うと、また前を向いて階段を下りはじめる。望はその後についていきながら、サンドイッチを包んでいるフィルムを途中まではがした。

サンドイッチを口にして呟く。

「おいしい。久しぶりに、自分で作ったもの以外のサンドイッチ食べたな」

その呟きを耳聴く聞きつけたらしい。桐野が振り返る。

「何？ あんた自分でサンドイッチとか作るの？ 意外。料理とか全然出来なさそうなのに」

「そうかな。でも、お弁当とかも僕が作ってるよ。うち、母さんいないから」

そう言うと、また急に桐野が立ち止まる。慌てて、ぶつからないように足を止めた。

「だから、急に立ち止まったら危ないって……」

「吾桑、あんた、母親いないの？ 離婚？」

注意しようとした言葉を、桐野が途中で遮った。望は、半分まで食べ終えたサンドイッチを無意識に強く握る。サンドイッチに入っていた胡瓜が落ちたが、気づかなかった。望は、こちらを振り向いた桐野に、笑顔を作ってみせる。

「知らない。教えてもらったことがないんだ。母さんが、なぜいないのか。生きているか死んでいるか。知らないんだ」

その言葉に、桐野は視線を落とした。嫌な空気になってきたと思

った望の耳に、桐野の叫び声が突き刺さる。

「あー。ちよつと、胡瓜落ちてるじゃないの。人がせっかくあげたのにー。ちゃんと拾いなさいよね」

そう言つて桐野は踵を返すと、そそくさと階段を下りていった。

望は言われた通り落ちた胡瓜を拾うと、桐野の後を追った。

第二章 面影

サンドイッチを食べ終わったので、教室に寄ってごみを捨てた。そんなことをしていたため、桐野を見失った。望は職員室に向かって、廊下を走る。角を曲がった時、誰かとぶつかり尻餅をついた。紙が舞う。望がぶつかった人物が持っていたプリントか何かだろう。

「あ、すみません」

望は慌てて起き上がり、落ちた紙を拾う。

「いや、こっちも前が見えてなかったんだ。悪かったな」

大人の男性の声だ。先生か。不味かったかな。望がそう思った時。不意に、背筋に悪寒が走った。何故だろう。背後に冷気を感じる。腕に鳥肌が立ったのが分かった。

望は紙を拾う手を止めて、ゆっくりと後ろを振り返る。

女がいた。

白いワンピース姿の女が、数メートル先に立っていた。顔立ちは帽子の陰に隠れて良く見えない。はっきり分かるのは口元だけだ。その口元は今、しっかりと引き結ばれている。望は息を飲んだ。

何故消えない？ いつもなら、一瞬しか視界に入らないのに、こんなに長い間、ここに立っているなんて。

望は彼女から目が離せなかった。近くには立ち話をしている女子生徒もいるが、彼女の存在には気づいていないようだ。紺色の制服を着た生徒の中で、彼女の白いワンピース姿はとても目立つのに。

「おい、どうかしたのか」

男性の声に、望は我に返った。ゆっくりと首を動かし、声の主を見る。

三十代前半くらいの、男性だった。望は始めてみる顔だったが、教師だろう。その教師が、望と顔を合わせた瞬間、驚いたように目を見開く。教師の表情を見て、既視感に似た感覚が望を襲った。何

故だろう。この表情、否、顔に見覚えがあるような気がする。

「なぜ、ここに……」

教師の掠れたような囁き声が耳に入った。途端、頭がひどく痛み出す。望は持っていた紙を床に落とし、頭を両手で押さえた。

疼くような痛みが、次第に強くなる。ふいに、周りの音が遠くなった。教師が何か言っているが、分からない。聞えない。そして、そのまま、望は意識を手放した。

ゆっくり目を開けると、見知らぬ天井が視界に入った。自分の部屋の天井は、木目が見えるが、この天井は白い。そんなことを思った時、横から声が降ってきた。

「お、目を覚ましたな。おい、大丈夫か」

聞き覚えのある声だ。

望は緩慢な動作で、声が聞こえた方向に顔を向けた。爽やかに整った顔立ちの少年がいた。望は少年の名を呼んだ。

「井上……」

クラスメートの井上晴大だった。その横には国立と、桐野の姿も見える。

「ここ、どこ？」

「保健室よ。先生はいないけど……」

望の問いに答えたのは桐野だ。桐野は望の寝ているベッドのそばへ寄つてくると、望の顔を軽く覗きこんだ。

「急にいなくなったと思ったら、廊下で倒れてるんだもん。びっくりしちゃった。授業始まっても起きないし。もう放課後よ。まあ、吾桑が倒れたおかげで、担任に頼まれてた用事、手伝わなくてすんだけど。……本当にびっくりしたわ」

「……ごめん」

とりあえず謝った。だが、倒れたと言われても、よく分からない。

少しずつ記憶を辿ってみる。昼食を取っている時に桐野に呼ばれて、職員室へ向かう途中に、教室に寄り道した……。

そこまで考えた時、頭痛を覚えた。無意識に頭に手をやった瞬間、思い出す。そう、意識を手放す前に、誰かにぶつかったのだ。

「あの人、誰だったんだろう」

疑問が口についてでた。それを聞きとがめたのは、国立だった。

「何だつて？ 吾桑まだ寝ぼけてるのか」

「違うよ」

国立の言葉に否定を返して、望はベッドの上に半身を起こした。井上がそれを助けてくれる。

「おまえ、まだ顔色悪いぞ」

望はそれに大丈夫と答えてから、桐野に向かって口を開いた。

「ねえ、桐野さん。僕が倒れた時、近くに先生がいたと思うんだけど、その先生見た？ その先生の名前知らない？」

「知ってるわよ。二年の国語担当の先生。名前は、えーっと」

「松島先生？」

国立が助け舟をだした。桐野の顔が笑顔になる。

「そう。松島先生。感謝しなさいよ、吾桑。松島先生があんたをここまで運んだんだから」

「そうなんだ。お礼、言わなきゃね」

望は呟くと、顔を俯けた。そうすると、白い掛け布団が目に入る。あの時。ぶつかった先生の顔を思い出した。三十代前半の先生。

顔立ちは悪くなく、印象が薄いといった感じでもなかった。初めて会ったはずなのに、何故、あの時、奇妙な感覚を味わったのだろう。一度、どこかで会っている。そんな感覚。なのに、思い出せない。

あの時、先生が漏らした呟きが気になった。何故こんなところに。その言葉が耳について離れない。もしかして、先生には見えたのだろうか？ 彼女が。白いワンピースを着た彼女が。そして、先生は彼女を知っているのか？ 分らない。分かるわけがない。いらす。気持ちが悪い。

「おい、気分悪いなら、我慢しないで吐いちゃえよ。トイレ行くな
ら付き添ってやるし」

井上の声が耳に入って、望は我に返った。ゆっくりと首を動か
し、井上を見る。

「ごめん。大丈夫。ちょっと考え事してた。平気だから。でも、あ
りがとう。井上ってやさしいね」

そう言って笑顔をつくると、井上が慌てたように顔を逸らした。
その頬や、耳がうつすらと赤くなっている。

「何で、赤面してるの？」

望が聞くと、井上は何も答えず背中を向けてしまった。そんな様
子を見ていた国立が、望のそばへ寄って来た。望の頭に手を置いて、
諭すように言う。

「照れてるんだよ。追い討ちかけたら可哀相だろ。それと、おまえ、
もう少し自分の顔に自覚持て」

言われて望は眉を寄せた。国立には、中学生の頃から、たまにこ
ういう注意を受ける。意味はよく分からないが。

望は背を向けている井上に声をかけた。

「井上。僕に惚れないでね」

その一言で、井上は望を振り返った。

「だ、誰が惚れるかー」

井上の怒鳴り声に、保健室にいた全員が耳を塞いだ。

第三章 記憶

食事を作る気がしない。お腹も空いていないし、父さんも遅くなるみたいだし、作らなくていいかな。そう思つて、望はテーブルに突つ伏した。そうすると、壁に掛けてある時計の音がやけに大きく聞えてくる。しばらくその音を聞くとともにしに聞いていると、その音の中に、違う音が混じつた。玄関のドアを開ける音だ。驚いて顔をあげ、時計を見る。針は、六時十八分を指していた。

望は、テーブルの上に置きっぱなしにしていた紙を手にとつた。広告のチラシだ。望はチラシの裏に走り書きされた文字を読む。

『今日も遅くなる。戸締りはしっかりして寝なさい。父より』

二週間。望は父親と顔を合わせていなかった。最近、父は望が寝てから家に帰つてきて、望が起きだす前に仕事へ行っているようなのだ。毎日同じ内容の手紙が置いてあるので、家に帰ってきていることは分かつていた。手紙には遅くなると書いてあるのに、どうして玄関のドアを開ける音が聞えたのだらう。望はそう思つて、扉に目をやつた。廊下を誰かが歩いてくる音がする。

扉がゆっくりと開いた。

望はリビングに入ってきた人物に向かって、口を開いた。

「あー。お久しぶりです」

そう言つて、軽い調子で手を上げてみせる。そんな望を見たからなのか、扉の縁に手をついて、父は疲れたようにうなだれた。もう片方の手にはスーパーの袋を持っている。買い物をしてきたようだ。ちょうど良かったと望は思った。今日はまっすぐ家に帰つて来たので、冷蔵庫にほとんど食材が入っていないのだ。

「のーぞーむー。どうせなら、お帰りなさいって言つて欲しかったな。お父さんは」

心なしか声にも疲れが見えた。望は立ち上がつて、うなだれたままの父のもとへ行く。

「えーっと、お帰りなさい。早かったね」

そう言つと、父は音がするのではないかというほどの勢いで、顔を上げた。背筋を伸ばして立つと、父がかなりの長身であることが分かる。居間の扉も、少し屈まなければ頭を打つほどだ。クラスの男子の中で、一番身長の高い望とは大違いである。顔立ちも似ていない。父は、野性味溢れる顔立ちの男前として、近所で評判だった。望の女顔とは正反対の顔立ちと言えるだろう。きっと、自分は母親似に違いないと、望は密かに思っていた。

「ただいま。倒れたんだって？ 担任の先生から連絡貰つて、今日は早く帰ってきたんだよ。仕事は無理やり部下に押し付けてきた」
そう言つて豪快に笑う。父は望の背に手をあてて、望をリビングのソファアへ促すように歩き出した。望は背を押されるままに歩き、父に軽く肩を押されて、ソファアに座った。

「まだ顔色は良くないな。貧血か？ ちゃんと食事してたのか？」

おまえ父さんがいないからつて手抜きしてたんだろ？」

望をソファアに座らせた父は、床に膝をつき、望の顔を覗きこんだ。望はそんな父から目を逸らす。心配そうに望を見る父の目に、哀しげな色を見つけたのだ。その目が望は嫌いだった。父はたまにこういう目をする。望はまるで、自分が憐れまれているような錯覚に陥る。哀しげな色は目だけに表れるのではなく、たまに、表情にもでる。怒っている時でも、笑っている時でも、たまにそんな表情が見えるのだ。

なぜ父がそんな顔をするのか。望は聞くことができなかった。聞いてしまったら、何かが壊れてしまう。そんな気がして。

「どうした？ 望。ぼうつとして」

何も言わず俯いた望を不審に思ったのだろう。父が望の頭に手をおいて問う。父の手の重みを感じながら、口を開いた。

「別に。何でもない」

父の溜息が聞えた。頭に乗っていた手が離れる。なぜか喪失感を覚えて、望は顔を上げた。すると、笑顔の父と目が合った。

「腹へったな。飯にするか」

「でも、今日は何も用意してないよ」

早く帰ってくるのが分かっていたら、それなりのご飯を用意できたのに。望はそう思う。

その間に、父は脱いだ背広をダイニングテーブルに置くと、腕まくりした。

「よし、じゃあ今日はお父さんがご飯を作るとしよう」

その言葉に、望は顔を顰めた。可愛い顔が台無しである。

「何だ。その顔は」

望の表情を見た父が、不満げに口を開いた。望は、顔を顰めたまま口を開いた。

「だってやだよ。父さんの作る料理ってみんな大味なんだもん」

「いいじゃないか、たまには。男の料理って感じだろ。スタミナ満点の料理を作ってやるぞ」

望の言葉に気を悪くした風もなく、父はいそいそとキッチンに立った。望が倒れた理由を貧血だと思っているのだろう。倒れた本当の理由を父に言うべきか。小さい頃から、たまにあるあの頭痛。今日はいつにも増して酷かった。倒れるほどだったのは、小学生の時代以来だ。だが、それを言うと、父はきつとあの哀しげな顔をする。それは見たくなかった。

望が色々と考えている間、父は、仕事帰りに買ってきたらしい食材を取り出していた。中身は、鶏のレバーや、ニラ。乾燥ひじきに、ステーキ肉、キャベツにジャガイモ、人参と、鶏がらスープの素。一体何を作るつもりなのだろうか。少し不安になったが、望は父が一度言い出すと聞かない性質なのを知っているので、もう何も言わないことに決めた。食欲は余らないのに、たくさん食えとか言われるのかな。そう考えると、よけいに疲れた気分になる望であった。

暗闇が広がっていた。全てが黒一色に覆われた世界。光はどこにもなく、望は恐怖を感じた。自分の腕すらも見えない真の闇。望は明かりを探してさ迷うが、前へ進んでいるのかも分からない。曖昧な感覚。ここは一体どこなのか。なぜ、ここにいるのか。

そんな事を考えた時、黒一色の世界に、白く光るものを見つけた。そちらに向かつて走ると、白く光るものが、どうやら人である事が分かってきた。

望は足を止めた。白く光るその人物が、たまに望の前に現れる白い女だと言う事が分かったからだ。昼間見た、冷たい空気を纏った彼女が脳裏を掠めた。白い女は、望が瞬きをした瞬間、目の前に立っていた。昼間見たときと同じ、白い帽子に、白いワンピース姿。顔立ちは分からない。やはり、見えるのは口元だけだった。

突如目の前に現れたことに驚き、悲鳴を上げて、望は後退る。尻餅をついた。それでも懸命に距離をとろうと手足を動かして後退を続ける。

白い女が腕を上げた。望は動きを止めて、白い女に見入る。初めて白い女が動いたところを見た。そんな、どうでもよい事を考える。白い女は、腕をまっすぐ前へ伸ばし、望の後ろを示した。

つられるように、望は白い女が指し示す方へ顔を向けた。

不意に、周りの景色が変わった。

雨が降っていた。アスファルトを叩くように激しく降り続く雨のせいで、望は濡れになっていた。濡れた服が重く、肌に張り付く感触が気持ち悪い。

先ほどまでいた場所とは違い、暗いが真つ暗闇ではない。うるさいほどの雨音。降り続く雨。望から数メートル先を、光が横切っていた。車の、ヘッドライトだろうか。そう思った時。その光よりも手前に、何かが倒れているを見つけた。望の位置からは、黒い影の塊に見える。

身体が震えた。だめだ。あれを見てはいけない。頭に警戒音が鳴

り響く。だが、身体は言うことを聞かない。望の思いとは裏腹に、身体が勝手に倒れている黒い影へ近づいていく。

恐ろしかった。言うことをきかない身体。触ってはいけない。触れたくないのに、望は手を伸ばす。嫌だ、嫌だ、嫌だ。誰か助けて

心の中でそう叫んだ時、強い力で肩を掴まれた。

望は痛みに驚いて目を開ける。

いつの間に、目を瞑っていたのだろうか。疑問が頭を過ぎった。ベッドの脇に置いてある目覚まし時計の針が、時を刻む音が耳に入る。自分の部屋だった。望は今、ベッドの上で半身を起こしているらしい。荒い息遣いが聞える。それが、自分の呼吸音だということに気づいたのは、しばらくたってからだった。

「望、大丈夫か」

近くから声がかかり、驚いて声の方を向いた。父親の顔がそこにあった。

「父さん……」

望は、いつの間にか強張っていた体から、力を抜いた。

父は、望の両肩に手を置いた。

「随分うなされていたな。父さんの部屋まで声が聞こえてきたぞ」心配が声に滲みでていた。望は居たたまれなくて、顔を俯ける。

「ごめん。朝早いのに起こしちゃったね」

「そんな事はいいんだよ。それより望、また変な夢でも見たのか？」

肩に手を置いたまま、父は望に問う。望は顔を上げた。脳裏に、先ほど見た映像が蘇る。あれは、夢だったのか。白い女が出てきた。彼女が指差す方向を見たとき、場面が変わった。雨が降っていて、光が横切っていて、そして、その手前に……。

そこまで思い出したとき、殴られるような痛みが頭を襲った。思わず、縋るように、肩に置かれていた父の腕を掴む。

「望？ どうした」

異変に気づいた父が、声をかける。だが、それに答えられないほど

の痛みが頭を襲う。

父が息を飲む。慌てたように、大きな掌で望の頬を包む様にして、顔をあげさせる。

「頭が、痛いのか？ 望」

小さく、望が頷く。すると、父は望の細い身体を抱きしめた。小さい子をあやすように、望の背をさする。

「いいんだよ。望。思い出さなくていい。何も心配いらなから。思い出さなくていいんだよ」

優しく、言い聞かせるように響く父の声。望は痛む頭を抱えながら、思う。

何を思い出さなくていいと言っのだろう。

自分が何かを、忘れていてもいっのだろうか。

第四章 母の影

昼休憩だった。今日は雨が降っているため、昼ごはんは教室でとることになった。望は珍しく、父が作った弁当を持って来ていた。小学生以来かもしれない。中学に入ってからはずっと自分で弁当を作っていたから。そんな事を考えながら、父親作の玉子焼きを、ゆっくりとよく噛んで食べていた望に、一緒に食事をしている井上が声をかけた。

「なあ、吾桑はどう思う？」

「玉子焼きが、美味しいなって思ってるけど？」

そう返すと、あからさまに溜息をつかれた。望は疲れたように肩を落とす井上から、その横で、紙パックのジュースを飲んでいる国立に視線を変えた。

「国立見て。井上もう弁当食べ終わってるよ」

少しぼうつとしていた間に、井上の前に置かれた弁当箱が空になっていた。望は黒板の上にある、壁掛け時計を見た。食べ始めてから、十分くらいしかたっていない。望の弁当箱の倍はありそうな大きな弁当箱なのに。そう思っただけで出た言葉が、さっきの言葉なのだ。国立は望に苦笑を返した。

「見てたよ。食ってるところも、食い終わったところも。ちなみに、俺も食い終わった」

そう言っただけで国立は、弁当箱の入った袋を持ち上げた。

「ふーん。でも、今日は僕のお弁当あげないからね。今日は父さんが作ってくれたから」

言いながら望は、弁当箱を手で隠すようにする。すると、国立が眼鏡の奥の目を見開いた。

「まじかよ。あのでかいなりで料理なんて作れるのか、おじさん。この、タコさんウインナーもおじさんが作ったって言うのかよ」

望の弁当箱の中に入っているウインナーを指差しながら、国立が

笑いを堪えているように見えるのは気のせいだろうか。

「なあ、俺の話は置き去りかよ」

井上が怒ったように声を上げた。国立が、井上の肩に手をやる。

「しょうがないだろう。吾桑はまた聞いてなかったんだから」

「しょうがないだろ。人の話はきちんと聞くべきだ。ここは友達として、ちゃんと注意すべきだろ」

真面目腐った顔で、井上が国立を見る。国立は肩を竦めた。

「聞えてたよ」

望は、井上と国立に聞えるように声を上げた。井上が怪訝そうな表情になる。

「何が」

「井上と国立が話してたこと。アイドルのモモカちゃんと、ユイカちゃんはどっちが可愛いかなでしょう。揉めてたよね。井上がモモカちゃん派で、国立がユイカちゃん派」

残り一個になった玉子焼きを箸で割りながら言われた言葉に、二人は驚きを露にした。井上は睨むように望を見据える。

「じゃあ何でさっきの質問の答えが、玉子焼きの話になるんだよ」

「だって井上、吾桑はどう思ってたか、そのとき思ってたことを言っただよ。この玉子焼き本当に美味しいんだよね。父さん玉子焼きだけは、作るの上手いんだよ。僕には出せない味だよ、うん」

「おい、おまえ今だけってとこ妙に強調しただろう」

国立のつつこみを聞いているのかいないのか、望は最後に残った玉子焼きを口に入れて、ご馳走様でしたと手を合わせた。

井上はもう怒る気力をなくしたのか、国立と顔を見合わせて溜息をついた。

「ちよつと、吾桑。あんた、ちゃんと松島先生のところお礼いったの？」

桐野の声が背後から聞こえ、望は顔を上向け、背を後ろへ逸らした。かろつじて、桐野の顔が見える。逆さだが。

「キモいからやめて」

言われて、望は身体を起こした。改めてイスに座ったまま、後ろに身体を捻った。

「吾桑。松島先生にお礼いってないんでしょう？ 私が付き合っただげるから、行きましよう」

言いながら、桐野は強引に望の腕を掴んでイスから立ち上がらせる。そのまま、教室の入り口へ向かって引き摺られるように歩くはめになった。望は国立と井上を振り返る。

「いつてらっしゃーい」

二人同時に口を開いて、手を振られた。井上も、国立もどこかにやけた表情をしている。なぜ二人がそんな表情をしているのか。望には理解出来なかった。

一階の職員室に行ったが、松島先生はいなかった。ちょうど近くにいた担任に、松島先生は北校舎の四階にある国語準備室にいると教えてもらった。望たちは北校舎へ渡り、四階まで上がる。国語準備室と書かれたプレートのあるドアの前に立った。ドアをノックしてから、望はドアノブに手をかけた。

「失礼します」

しばらく待ったが返事がなかったので、そつとドアを開く。

「誰もいないわね」

望の後ろから部屋を覗き込んで、桐野が言った。桐野は望を押しつけるようにして部屋へ入ると、中を見回した。

「それにしてもきつたない部屋ねえ」

望も部屋に入って、桐野の言葉に頷いた。確かに汚い。両脇の壁には棚が並べて置かれ、そこには資料集等の本が雑然と置かれていた。狭い準備室に無理やり真ん中に寄せ合うように置かれた机が五つ。机の上は例外なく散らかっていた。

「誰もいないし、教室戻ろうか」

「何言ってるのよ。少しくらい待ちましようよ。誰もいない準備室に入れることなんて滅多にないんだし、それに、お礼を後にしたら、絶対に吾桑は忘れるもん。こういうことはさっさと済ませた方がいいの」

「……わかったよ」

桐野には敵わない。桐野は望や国立と同じで、中学からの持ち上がり組みだ。しかも、中学三年間同じクラスで、高等部に入っても同じクラスになった。何だかんだと文句を言いながら人の世話をする桐野は、かなりの世話好きだと望は思っている。今回もその世話好きぶりを発揮しているのだろう。

望がそんな事を考えている間に、桐野は一つ一つの机を興味深そうに見ていた。だが、一番奥の机の前に来たとき、何かに気づいたように立ち止まった。

「あ、ここが松島先生の机っぽいよ」

そう言って、桐野は望を手招きする。

「どうして分かるの？」

桐野の横へ立つと、桐野は机の上に放置された教科書を指差した。裏表紙に松島要一と書いてある。なるほどと頷いて机を眺めてみる。雑然とノートや本が置かれた机の上に半ば埋もれるように、写真が飾られているのが目に入った。そこには松島先生と、女性が並んで写っている。

「彼女かな」

写真を見て思わず出た言葉に、桐野が反応を示した。

「ああ、学園長の娘でしょ。知らないの？ 松島先生、もうすぐ学園長の娘さんと結婚するのよ。松島先生ってカッコいいから結構狙ってる生徒多かったのに。残念」

「へえ、そうなんだ」

抑揚のない声で、望は相槌をうった。なるほど。やけに熱心にお礼に行こうと誘うわけだ。桐野はかっこいいという噂の先生を間近

で見たかったに違いない。ただ、世話好き振りを発揮しただけではなかったのか。望がそう思った時だった。桐野が声を上げた。

「あれ、これ何かしら」

名前の書かれた教科書の下から、新聞記事の切り抜きのようなものが見えていた。色が少し黄ばんでいるので、古いものだと思われる。桐野はそれを教科書の下から抜き取ると、記事に目を落とした。早い段階で、桐野の眉間に皺がよった。どんな記事なのだろう。望が興味を覚えたとき、桐野が望に話しかけた。

「ねえ、吾桑って、下の名前何だっけ」

「……酷い。中学三年間同じクラスだったのに、まだ覚えてないんだね」

悲しげな表情をして見せると、桐野が言葉に詰まった。

「うつ、そ、そんな顔しなくてもいいじゃない」

「僕はちゃんと覚えてるのにー。酷いよ、理香子ちゃん」

顔を手で覆って泣きまねをしてみせると、桐野に頭を叩かれた。顔を上げて桐野を見ると、顔を赤くして望を睨んでいた。

「ちよつと、勝手に下の名前呼ばないでよね。もう、何なのよ」

桐野は言いながら、今度は望の肩を叩く。

「痛いなあ。何も殴る事ないのに。理香子ちゃんってば、乱暴なんだから」

叩かれた肩をなでながら、恨めしげに桐野を見やる。桐野は胸の前で握りこぶしを作って、望を睨んだ。望は桐野をからかうのをやめることにする。これ以上叩かれてはたまらない。

「望だよ。下の名前」

そう言うと、桐野の表情が曇った。疑問に思う間もなく、桐野が望に新聞記事の切り抜きを差し出した。何気なく受け取った望に、桐野が言った。

「これ、この記事に載ってる親子って、あんたのことじゃない？」

望は戸惑いながら、記事に目をやった。新聞に載るようなことしたことないけど。そう思いながら目にした記事の見出しに、息を飲

んだ。

『親子轢き逃げ犯、自殺か？ 崖から転落死』

轢き逃げ事故の記事のようだった。だが、そんな事故と望にどんな関係があるというのか。そう思うが、望は心臓の鼓動が早まるのを感じた。

ゆつくりと、目で記事を追う。

『八日未明。坂崎市の路上で、轢き逃げされた女性と子どもが発見された。発見されたのは、坂崎市在住の吾桑咲子さん（二十六）と息子の望くん（六）と判明。咲子さんは、重体。息子の望くんは全治三ヶ月の重傷を負った。坂崎署は、十三日。ひき逃げ事故の同日。崖から転落死した人物が乗っていたと思われる車両が、轢き逃げをした車両である可能性が極めて高いと発表。同署は、轢き逃げをした犯人が思い余って自殺したのではないかとの見方を強めている…』

…』

「何、これ……」

記事に目を落としたまま、呟いた。確かに、同じ名前だ。事故に遭った子どもの名前は吾桑望。望と同姓同名だ。この記事は十年前のものなのだろうか。そんな疑問が頭を過ぎる。新聞紙は確かに黄ばんでいる。でも、そんなことあるわけがない。ただ、同じ名前だっただけだ。そう思うのに、どこか否定しきれない自分がいた。何かが引つかかる。そう、今朝方見たあの夢。豪雨の中に、一筋の光。その光を車のヘッドライトだと思ったのではなかったか？ そして、その光の手前にあつた黒い塊は、もしかしたら、轢かれた自分の母親だったのではないだろうか。

望は無意識に口元に手をやっていた。だが、そんな事があればきつと憶えている。こんな事故なんて記憶にない。記憶にないのだ。

「あ、吾桑。大丈夫？ 顔色悪いけど。また気分悪くなった？ 倒れたりしないですよ」

望の肩を掴んだ桐野が声を掛けた。望は我に返ったように、桐野を見る。

「ごめん。ビックリして、これ、僕のことなのかな」

「そ、そんなの分らないわよ。憶えてないの？ 六歳くらいだったら、憶えてるでしょう」

そんなこと言われても、分からない。混乱する望の耳に、ドアの開く音が聞えた。驚いて入り口に目を向けると、教師の松島が、驚いたようにこちらを見ていた。

「おまえたち、こんな所で何をやってるんだ」

剣呑な表情で問う松島に、桐野が無理やり笑顔をつくってみせた。「せ、先生を待ってたんです。私達」

桐野が望に、そうだよねと同意を求めたが、望はそれに頷く事が出来なかった。手の中にある新聞記事のことが気になっていたのだ。望はまっすぐ、松島を見詰めた。

望に見つめられた松島が、気おされたように一瞬目を逸らした。

桐野は、望と松島を見比べた後、焦ったようにこう言った。

「あ、あの、先生。彼がその、えっと、お、お礼。そう、お礼を言いたくて。この間倒れた時、先生に保健室まで連れて行ってもらったお礼です。ほら吾桑。ちゃんとお礼言いなさいよ」

強い力で、肩を叩かれ望は一瞬顔を顰めて桐野を見た。だが、桐野に文句を言うことなく、松島に向かって口を開いた。

「この間は、ありがとうございます」

そう言って頭を下げる。松島は、その言葉に我に返ったように声を上げた。

「あ、ああ。身体の調子はどうなんだ？」

心なしか松島の顔から血の気が引いているように見える。望の気のせいなのだろうか。

「問題ありません。でも、気になる事があるんです。先生。先生と僕は以前どこかでお会いしたことがありますか？」

望が昨日倒れる前に覚えた、既視感に似たあの感覚。いつかどこかで会っている。そんな気がするのに、思い出せない。また、頭が痛くなりそうだった。しかし、ここで倒れてしまっただけは、いつまで

たつても聞けずじまいだ。

松島は答えない。黙って、望を見ている。望は持っていた新聞記事の切り抜きを、松島に見せるように突き出した。

「これ、先生の机の上にありました。なんで、こんな記事が先生に机にあつたんですか？ これ、この記事に載ってる車に轢かれた子どもって、僕のことですよね」

最後は口調が荒くなった。桐野は、望の腕を掴んで軽く引く張った。

「やめなさいよ。吾桑。これじゃあ、お礼じゃなくて、喧嘩売つてるように聞こえるよ。相手は先生なんだから」

小声で、嗜めるように言う桐野の腕を振り払って、望はまっすぐ松島を見詰める。松島は軽く息をつく、望たちに向かって歩き出した。望はつい、後退りしようとしたが、桐野がいたため出来なかった。松島は、人の良さそうに見える笑みを浮かべ、望の前へ来ると、望が手にしていた新聞記事を取り上げた。

「勝手に人の机の上にあるものを触るのは、感心しないな」

そう言いながら、二人を見る。

「す、すみません先生。最初にその記事見つけたの私なんです。つい、好奇心に負けて」

「僕は、そんなこと聞いてるんじゃないやありません。先生と僕の関係と、その事故のことが聞きたいんです」

冷や汗をかいていた。なぜだか、松島が怖い。それでも、望は松島を睨むように見上げた。松島は苦笑を漏らした。

「そんな風に言うつてことは、君は先生のこと、憶えてないんだね」
望は素直に頷いた。記憶にはない。ただ、どこかで会っているような気がするだけだ。

「お、憶えていません。会ったことがあるんですか」

松島は新聞記事を机の上に置くと口を開いた。

「いや、会ったといえるほど顔をあわせてない。君が憶えてないのも無理はないな。先生は、君のお母さんのお葬式に出席したんだ。

……この記事、読んだんだな？」

松島は視線を新聞の切り抜きにおいて問うた。松島の問いに、望は頷いた。それに頷き返して、松島は言った。

「この記事に書かれている、崖から転落した人物が乗っていた車……これは先生の車なんだ」

「え？」

桐野が驚いた様に声を上げた。それを気にした風もなく、松島は淡々と続ける。

「君達親子をひき逃げしたのは、先生の友人だった……」

桐野が息を飲んだ音が、望の耳に入った。やけにその音が近く感じたのは、桐野が望の腕を掴んだまま、望に身体を寄せいていたからだろう。望は、松島の言葉の続きを待った。

「先生は、友人に車を貸したんだよ。友人は車を返そうと、先生の家に来る途中で、君と君のお母さんを跳ねてしまった。小心な奴だったからな。その友人は、そのまま現場を立ち去って、自殺の名所と呼ばれている崖から飛び降りたんだ……」

「……」

松島の告白に、望は何も言うことが出来なかった。どうしていいか分からない。何より、自分はなぜ、その事故のことを、そして、母親のことを忘れてしまっているのだろう。そんなことがあったなら、強く記憶に残っていていいはずなのに。父はこのことを言っていたのだろうか？ 思い出さなくていい。そう言っていたのはこのことなのか？ 思い出さなくていいわけがないじゃないか。こんな大事なこと、忘れていたままでいいわけがないじゃないか。

「あの日、いや、そもそもアイツに車を貸さなければ、あんな事故は起きなかった。悔やんだよ。アイツに車を貸しさえしなければ、アイツの人生も、君達親子の人生も、もっと違った形になったんじゃないかって……」

そう言って、うなだれた松島に、望ではなく桐野が声をかけた。

「先生。先生がそんな風に思うことないですよ。先生は悪くないで

す。そんな風に思うのはおかしいと思います。そうよね、吾桑」

呼ばれて、望はいつの間にか俯けてしまっていた顔を上げた。

「そう、です。先生は悪くないです。教えてくださってありがとうございます
ございました」

そう言つて、望は力なく頭を下げた。

「僕、どうしてだか、事故の記憶がなくて、母親のことも、事故のことも全く憶えてないんです。どうしてだろう。酷い子どもですよ
ね」

つい、愚痴めいたことを言ってしまった。松島は、望の肩に手を置いて、口を開く。

「君が記憶喪失だと言うことは、君のお父さんから聞いていたよ。余程事故のことがショックだったんだな。氣に病む必要はないよ、辛い事は忘れてしまった方がいい」

「でも、母親のことです」

つい、また声を荒げてしまった。望は松島にすいませんと頭を下げてから、部屋を出て行こうとした。桐野が慌てて追いかける。

「ちょっと、吾桑」

声を掛けられたからではないが、望はドアの前で立ち止まり、松島を振り返った。

「先生。僕とぶつかった後、なぜ、驚いた顔したんですか？」

そう聞いたのは、不意に思い出したからだ。松島が驚いた顔をして、なぜここに、と言ったのを。松島は白い女が見えていたのではないかと思つたことを。

「それは、君がお母さんとそっくりだったからだよ」

予想外のことを言われ、望は面食らった。松島は続ける。

「遺影に写っていた君のお母さんの顔と、君がそっくりだったんだ。それで、事故のことを思い出した。君の名前を聞いて、さっきの新聞で、あの事故に遭った子どもかどうか確かめようと思って、新聞記事を持ってきたんだ」

「白い女を、見たわけではなかったんですね……」

「白い女？ 何だそれは」

松島が訝しげな声を上げた。

「白いワンピースを着た女性が、見えるんです。僕の周りに、たまに現れるんですよ。信じてくれないかもしれませんが、見えるんです。先生が驚いた顔をして僕を見た時、僕の背後にその白い女が立ってたんです。でも、先生には見えなかったんですね」

少し落胆し、望は松島に向かって頭を下げると、今度こそ踵を返して部屋を出て行った。松島の反応を見たいとは思わなかった。どうせ、頭がおかしい奴だと思われるに違いない。それでも良かった。ただ、なんとなく言いたかったのだ。あの白い女のことを。

桐野が後ろから、待ちなさいよと言っている声が聞こえた。だが、立ち止まろうとはしなかった。頭の中がごちゃごちゃだ。白い女のこと、そもそつだが、母親のことも、事故のことも。何も分からない。憶えていない。母親が死んでいたなんて。父が母のことを口にしないのは、余程酷い別れ方をしたからだと思っていた。きっと、どこかで母は生きていると、何となくそう思っていたのに。

望はやるせない気分で、廊下を歩き続けた。

第五章 イタズラ

望は溜息をつきなくなった。朝の登校時間。人の多い玄関に、望はいた。

靴箱を開けると、中にゴミが詰まっていた。学校へ来るなどかかれた手紙付き。望はそのゴミと一緒に手紙もかき出して、念のために持って来ていたゴミ袋に入れた。そして、上履きを取り出し、逆さにして振ってみる。昨日、そのまま履いて中に折れた画鋏が入っていたため、痛い思いをしたのだ。昨日の二の舞はごめんだった。

「おーお。またかよ。今日で何日目？」

「つつか、誰だよ。こんなことした奴。すっげえム力つく」

背後からそう声をかけられた。望はそちらを振り返る。そこにいたのは、国立と井上だった。一緒に登校してきたのだろ。井上も国立も、到底教科書が入っているとは思えないほど薄い学校指定の鞆を手に提げている。井上は顔を顰めて、望が床に置いたゴミ袋を見詰めていた。望は国立の問いに答えた。

「三日目。犯人も懲りないよね。いい加減面倒くさくならないのかな。こんなことして」

淡々とした口調で望は言った。イタズラ、否、嫌がらせと言うべきか。松島に事故のことを聞いた次の日から、望に対する嫌がらせが始まった。ただでさえ、自分が記憶喪失だったと言うことにショックを受けていたのに、この嫌がらせだ。二重に気分が沈む。犯人の目的も、なぜ、こんな下らない嫌がらせをするのかも分からない。高等部に入ってから、結構普通に周りに溶け込んでいたつもりだったのに。昔からたまにこういうことはあったのだ。国立に言わせると、吾桑は目立つから、そういう対象になりやすいと言うことらしい。今さら、靴箱をゴミ箱代わりにされたところで傷つきはしないが、不愉快であることに変わりはない。

ゴミ袋の口を縛ろうと、ゴミ袋に視線を落とした望に井上が言っ

た。

「おまえ、もう少し怒れよ。頭にくるだろう普通」

「そうだね。不愉快だけど、この犯人結構親切だよ。僕、中学の時、生ゴミ入れられたことあったから。あれ最悪だよ。臭いんだ。靴箱も、上履きもしばらく臭いとれなかったもん。変な汁とか着くし」

「……意外と苦労してんだな。おまえ。でも、犯人に親切とかいうのはどうかと思うぞ。まあ、おまえのそういうところが、こんなことした犯人は癪に障るんだろうけどな」

「まあ、それはどうか分かんが、吾桑。中学の時の嫌がらせは、結局犯人分からずじまいだったっけ？」

国立がそう言いながら、望の横で上履きに履き替えた。

「うっん。犯人は分かったよ。だから、僕に嫌がらせしたことばらされなくなったら、もうやめてっってお願ひしといた」

「それ、お願いじゃなくて、脅しじゃねえか」

井上の言葉に、望は顔を上げた。その時、右側から何かの気配を感じて、望はそちらに顔を向けた。そして息を飲む。

また、白い女だ。

いつも、目にするときと同じ距離にいる。生徒が行き交う階段の前に、彼女は一人静かに立っていた。じっと、望の方を見詰めるように。彼女の表情は、やはり分からなかった。どうして、今日もずっと望の視界に映っているのだろう。前までは、視野に入っただけと思ったら消えていたのに。少しずつ、何かが変わってきているのだろうか。何が変わってきているのかは、分からないが。

「おい。吾桑。また、どっかいてるだろう」

「白い女か？」

国立の嬉しげな声に、望は我に返った。

「あ、うん、そう。でも、今消えちゃった」

望は残念だったねと、国立に作り笑顔を見せる。国立は、がっかりしたように、顔を伏せた。その動きで、かけていた眼鏡が少しずれる。

「何だ残念。また見損なつた」

「げー。何でそんなもの見たいんだよ。物好きな奴」

井上が思い切り顔を顰めた。それに、望は小さく笑った。口を縛り終えたゴミ袋を持ちあげる。

「これ、収集所に持っていくてくるから、上履き見といてね」

そう言つと、望は二人が嫌がる声を上げる前に、外へ走り出た。早くゴミを捨ててこないと、授業が始まつてしまふ。授業が始まつても、二人は待っていてくれるだろう。だから、望は走つた。

最近、昼休憩に屋上へ上がるのが、定番になりつつある。よく晴れた青空に、直視できないほどの光を発する太陽が輝いている。今日は風が強い。そのため、給水塔の壁に、背を預けるようにして、国立や井上とともに食事をしていた。給水塔の壁はちょうど良い風除けた。

「今日は酷いな。まず、靴箱のゴミだろ。それから、破かれた教科書とノート、机の中にカッターの替え刃。最悪だな」

国立は、今日、昼休憩までに望に起こつたことを列挙しながら指を折つた。井上が大量にご飯を口に詰め込みながら頷く。声は出せないようだ。望は人差し指に巻きつけた絆創膏を見ながら口を開く。「うん。指切つたのは痛かつた」

三時間目の体育の授業の後。四時間目の授業の用意をしようと机の中に手を入れた時、望は痛みを感じた。瞬時に手を引き抜いてみると、人差し指から血が滴つた。机の中に、カッターの刃が仕込んであつたのだ。余り深く切らなかつたことが不幸中の幸いか。一体誰がこんなことをしているのかは分からないが、嫌がらせはいい加減やめて欲しい。恨まれる覚えなどないのに。

それよりも望は気になる事があつた。それは、嫌がらせが起こるたびに、あの白い女が現れるということだ。この嫌がらせに、あの

白い女が関わっているとでもいうように。

「ひふおごふおみふあいひゆうはよ」

井上が声をあげた。口にものを入れながら喋ったので、何を言っているのかさっぱり分らない。国立が顔を顰めた。眼鏡の奥から井上を睨む。

「おい、口にももの入れて喋るなよ。汚ねえな」

井上は水筒の蓋に注がれたお茶を飲み干した後、一息ついた。そして、国立を睨みつける。

「うるせえ国立。おまえは俺の母親か？」

「はいはい、いい子は黙ってようね」

国立は井上をからかうように笑顔をつくる。井上は胸の前で拳をつくった。

「てめえ」

険悪な雰囲気になった時、望が二人に向かって声を上げた。

「やーめーてー。僕のことと争わないでー。いくら僕が可愛いからってー」

台詞を棒読みしているようだった。井上と、国立が噴出すように笑う。

「何だそれ、どこのお嬢だよ」

「つつか、全く感情ともなってねえし。まず、おまえのことで争ってねえし」

二人にそうつつこまれて、望は肩を竦めた。そんなの分かっていると言いたげに。

「ねえ、白い女が犯人ってこと、ないよね」

望は思いつくまま、そう口にした。井上があからさまに顔色を悪くした。国立は思案顔で、顎に手をやる。

「ありえないだろう。幽霊がするイタズラにしちゃあ、現実的過ぎる」

国立の言葉に、望は反論する。

「でも、僕、恨まれるようなことした覚えはないし。それに、僕がイ

タズラ受けるたびに、あの女は現れるんだよ。それっておかしくない？」

「おい、白い女なんて、見えなかったぞ。何処にも。そんな白い女なんていやしねえの。おまえの幻覚だろ」

井上が声を上げる。望の顔が悲しげに歪んだ。

「幻覚かどうかなんて、そんなの分からないけど。でも、僕には見えるんだ。嘘なんてついてないよ」

そう言いながら、望が顔を俯ける。井上があつと声を上げた。しまったという表情をして、国立を見る。国立は、望に向かって顎をしゃくつた。おまえが何とかしろということだろう。井上は望の前で、拝むように手を合わせた。

「ごめん。あの、お、おまえのこと、嘘つき呼ばわりしたつもりはないから。そうだよな。おまえには見えるんだよな。俺に見えなかったて、おまえが見えるって言うんなら、俺、信じるから。それが、例え、ゆ、幽霊でも」

望はその声に、顔を上げた。上目遣いに、涙の溜まった目を井上に向ける。ただでさえ可愛らしい顔が、よけいに際立って見える。

「やっぱり、井上って優しいよね」

そう言つて、じつと井上を見詰める。するとなぜか、井上の顔が赤くなつた。青くなつたり赤くなつたり忙しい奴だ。望がそう思っている、国立が呆れたように声を上げた。

「吾桑、その顔反則だから」

望は国立の言葉に、首を傾げた。それにはとくに反応を見せず、国立は井上に顔を向けた。

「井上、俺、偏見ないからな。もし、おまえが吾桑に惚れても、俺一応応援するし」

井上は望の腕を掴んでいた手を床におろしてうなだれる。肩が震えていた。しばらくその様子を眺めていると、突如井上が顔を上げた。

「そんな応援、いらんわー」

井上の叫びは、一階の職員室まで届いたという。

放課後。靴を履き替えた後、望は玄関を出た。ゴミ捨て当番に当たっていたので、望はゴミ袋を半ば引き摺るようにして、収集所へ向かう。北校舎の横に沿うように続く道を進むと、収集所がある。それにしても、重い。井上の言葉に甘えて、一緒に持ってもらえばよかったと少し後悔した。井上と国立はまだ教室にいるはずだ。一緒に帰る約束をしている。

そういえば、今日は久しぶりに父さんが早く帰ってくるって置手に書いてあった。望はゴミ袋を引き摺って歩きながら、ふとそう思った。

望が倒れた日以来、また父とはすれ違いの生活を送っていた。母親の事故のことを聞きたくても聞けなかったこの数日間、やけに長かった。だが、一方で安堵もしていたのだ。事故のことを聞くのが怖い。父親がどういう反応を示すのか、それが分からなくて怖いのだ。だが、今日は聞くことに決めている。父の機嫌が悪くならないように、今日は父親の好物をつくるつもりだ。

不意に、前方に気配を感じて立ち止まった。立ち止まりなくなるほどの威圧感を、前方から感じたのだ。望は顔を上げた。この気配には覚えがある。

前方にまた、白い女がいた。

望が白い女を視認した直後。目の前を何かが落下していった。目の前で落下したものが、道に当たって砕けた。大きな音が当たりに響く。破片が飛び散り、望は無意識に顔の前に手をやって破片を避けた。近くにいた生徒の間から悲鳴が漏れる。

望は目線を下し、目の前に落ちた物を見た。砕けているから、分かり辛い、それは大きな花瓶のようだった。この花瓶が頭上から落ちてきたのだ。たぶん、道に並走するように建つ、北校舎のどこ

かから。もし、あの時、白い女を見て立ち止まらなかったら、頭に当たっていただろう。しゃれにもならない。下手をすれば死んでいた。これも嫌がらせの一つなのか？ そう思うと、背筋が寒くなる。ふと、望は頬に痛みを感じて手をやった。その手を見ると、血がついていた。砕けた花瓶の破片が頬を掠めたのだろうか。

「おい、吾桑。大丈夫か？」

不意に肩を掴まれ、望は声の主を見た。なぜか、井上がそこにいた。井上は切迫した表情で、望を見ている。

「井上、何でここに」

「おまつ。そんなことより血、血がでてる」

井上は望より動転している。そんな井上に、大丈夫だと言おうとした時、冷気が頬を撫ぜた。嫌な予感がする。額に冷や汗が浮かぶ。真横に気配を感じる。望はゆっくりとそちらに、顔を向けた。その目に女が映る。望は無意識に悲鳴をあげて、後退ろうとした。だが、井上の足に躓いて、尻餅をつく。その間も、望は白い女から目が離せなかった。

「お、おい。吾桑？ どうしたんだよ」

望が急におかしくなったとも思っただろうか。井上が、膝をついて望の顔を覗きこんだ。右手で望の肩を掴んで揺する。

「おい、どうした？ 急に悲鳴あげて」

望は、ゆっくりと右腕を上げて、白い女を指差した。その腕が振るえている。

井上は望の腕から、望が指差している方向へ目を向けた。そして、息を飲む。望の肩を掴んでいた手に力がこもる。

井上にも見えた。望には信じると言ったが、どこか半信半疑だった女の姿が。望や国立が白い女と呼ぶ、白いワンピース姿の女が目の前に立っていた。

ついさっきまで、こんな女はいなかった。

望と井上は呆然とその女の姿に見入った。帽子の陰のせいで、女の口元しか見えない。女の、しっかりと引き結ばれていた口元が、

不意に動いた。

ゆつくりと、口角が上がる。

女は笑みを作った。

まるで、何かに満足したとでもいうように。

第六章 母

家に帰ると、父がもう帰宅していた。望は手を洗い、私服に着替えてから、リビングに入る。父はソファ―に座って、テレビを見ていた。望が入ってきたことに気づいたのか、父が振り返る。そして、一瞬呆けた顔をした。

「おい、どうしたんだ。その顔」
言われると思った。

望は頬に大きな絆創膏を貼っていた。花瓶の破片で切った傷を、保健室で手当してもらったのだ。傷自体はそう深いものではなく、保険医もすぐに治るだろうと言っていた。望は、説明するのが面倒だった。

「ちよつと、切ったんだよ」

「何をどうやってたら、顔なんて切るんだ」

早々に話を打ち切りたかったのに、父は食い下がった。

「それは、花瓶が割れて、破片が顔を掠めたから……」

そう言つと、父はあからさまに溜息をついた。

「危ないなあ。まったく。注意しろよ」

「うん」

どうやら父は、望が花瓶を落としたと思ったのだろう。頭上から花瓶が降ってきたなどと説明した日には、学校に乗り込んでいきかねない。父はそんな過保護なところがある。望は、面倒くさいことにならずにすんだと、ほっと息をついた。

「それにしても、よりにもよって、顔を怪我することないのに。せっかく父さんに似ずに可愛い顔して生まれてきたんだから、大事にしろよ」

そう言いながら、テレビに視線を戻した。望はそんな父を凝視しながら、口を開く。

「僕が母さんに似てるから、そう言つこというの？」

父は驚いたように望を見た。だが、口を開こうとしない。テレビから、場の空気にそぐわない楽しい笑い声が聞えてくる。

「僕は、母さん似なんだってね。母さんが死んでるって、どうして教えてくれなかったの」

「怒ってるのか？ 望」

「別に怒ってないよ。聞いてるだけ」

抑揚のない声で望はそう口にする。そのまま続けた。

「事故だったんだってね。どうして、僕は憶えてないの？ 僕も一緒に事故にあったはずなのに、六歳だったのに。どうして母親の顔すら憶えてないんだろう」

最後の方は独白のようになっていた。父はじつとそんな望を見詰めていたが、ふと思い出したようにテレビのリモコンに手を伸ばした。父はテレビを消すと、望に向き直った。その表情はいつになく真剣だ。

「望。頭、大丈夫か」

その言葉に望は顔を顰めた。

「僕は正気だよ」

そう言つと、父は瞬間驚いた顔をした。そして、しまったとでもいうように、顔を顰める。

「ああ、悪い。言い方が悪かったな。違うんだよ。おまえの頭を疑ったわけじゃなくて、頭痛がしてないかどうか聞きたかったんだ。おまえ、母さんのこと思い出そうとすると、いつも頭が痛くなっただろう？」

言われて、望は目を見張る。そうだったのだろうか？ 小さい頃よく起こっていた激しい頭痛。あれは、母親のことを思い出そうとして起こっていた頭痛だったのか。望は自分の中で合点が言ったような気がした。頭痛を訴える望に対して、父が言ったあの言葉。思い出さなくていい。あれは、思い出そうとするなということか。頭が痛くなるほどの辛い記憶なら、忘れたままでいい。思い出すことなどない。そう、父は言いたかったのか。

「僕は、記憶喪失だって言われたんだ」

望は俯いて、そう口にだしていた。父が、ソファから立ち上がった気配する。父は望のそばに寄ってくると、望の背に手をかけた。「望。座って話そうか」

望は頷いて、父に促されるまま、ソファに腰掛けた。

「本当に、大丈夫なんだな？」

聞かれて、望は頷いた。今のところ頭痛はない。

目の前のテーブルの上には、マグカップが二つ置かれている。先ほど、父が、紅茶を入れてきてくれたのだ。これでも飲んで、少し落ち着いてから話をしよう。そういうことらしい。

望と父は、しばらく無言で紅茶を飲んでいた。望はミルクティー。父はストレート。ティーパックをお湯に長くつけすぎていたせいなのか、望が入れるものよりも少し苦い。望が半分ほどまで、紅茶を飲んだとき、不意に父が声を上げた。

「なあ、望。事故のこと。誰に聞いたんだ」

問われて、望は父に問い返した。

「松島要一つて名前覚えてる？」

父は手で頭を掻いた。せつかく仕事用に固めていた髪がそのせいで、ぐしゃぐしゃになる。

「松島、松島。……ああ、思い出した。あの、犯人の友達か……」

呟くように言われた父の声からは、感情が読み取れなかった。望はじっと、父の顔を見る。父の顔から、表情がなくなっていた。

「なんで望が、その名前を知ってるんだ」

「学校の先生なんだ。僕は直接教えてもらってないけど、この間初めて会って。それで、事故のことを教えてもらった。……犯人が死んだことか」

話を聞いていた父の表情が曇っていった。望は言いながら、自分

の声が小さくなっていくのが分かった。父が舌打ちをした。望は驚いて肩を震わす。なぜか、父から怒気を感じたのだ。

望が肩を震わせたことに気づいたのか、父ははっとしたように笑顔をつくった。無理やりつくったような笑みだった。

「どうして事故のこと、黙ってたの？」

そう言うのと、父はあの哀しげな顔をした。望の胸が痛む。そんな顔など、してほしくないのに。

「おまえ達が事故にあった後。おまえが、記憶喪失になっていると医者に告げられた。父さんは最初、おまえに母さんの事思い出してもらおうと必死だったんだ。母さんが可哀相だった。事故の後も、しばらく生きていたから。もし、母さんが目を覚ましたとき、おまえが母さんのこと分らないなんて言ったら、母さん、悲しむから」
父はそこで、一端言葉をやめた。マグカップを手元へ引き寄せ、残った紅茶を一口飲んだ。

望は父を促した。

「それで？」

「それで、おまえに母さんの写真見せたり、母さんのことをおまえに話したり、色々と試してみた。だけど、おまえはそのたびに、頭が痛いつて泣きだしてな。頭が痛いつて泣くおまえを見て、父さんは自分が酷いことをしているって気がついたんだ。俺は、辛い体験をしたおまえの傷口を広げるようなことをしていたんだよ……」

父は手にしていたマグカップを持つ手に力を込めた。望はそんな父からマグカップを取り上げる。力を入れすぎて、割れてしまうのではないかと思ったからだ。実際マグカップが割れることはないだろうが、そう思った。

父は望に、苦笑を浮かべて見せた。望も、口元だけの笑みを向ける。

「ごめん。続けて」

望に頷いて、父はまた口を開いた。

「事故の一週間後に、母さんが亡くなったし、望が辛いなら、思い

出せないなら、無理に思い出させる必要はないと思った。だから、家にあつた母さんの思い出の品や、写真を全部隠した」

父はその頃のことを思い出したのだろう。疲れたように、顔を手で覆つてうなだれた。望はそんな父から目を逸らす。

父もまた、傷ついていただろう。母の死に。父は母が嫌いだから、何もいわないのだと思つていた。だが、それは違った。父は言いたくても、言えなかったのだ。母のことを。忘れてしまった息子のために、愛する人の話を口にできなかった。

「だから、僕は母さんの写真見たことがないんだ」

望の呟きに、父が頷いた。そして、ふと思いついたように、声を上げる。

「そつだ、望。写真見たいか？」

そう言つた父の表情がやけに晴れやかで、望は怪訝に思つた。

「誰の？」

そう言つて首を傾げる。

「望。この話の流れから言つて、母さんの写真しかありえんだろうが」

望は、そうかと手を打つた。父は待つていると言い置いて、リビングを後にする。しばらくして戻つてきた父の手に、分厚いアルバムが握られていた。父が望の横に腰掛けて、そのアルバムを望に差し出した。

「ほれ、母さんと父さんが結婚する前の写真だ。おまえが生まれてからのものは、全て、物置の奥にしまつていて、すぐにはだせないからな」

「へえ」

望は高鳴る胸を押さえ、アルバムを受け取つた。受け取つたアルバムを膝の上に置き、ゆっくりとアルバムを開く。

そこに写つていたのは、まだ若い父と女の人の写真。どれも笑顔だ。

父の友達だろうか。たまに見知らぬ人々も写っているが、大概、

同じ女性とのツーショット写真だった。

「うわー。自分が女装してるみたいでちょっと気持ち悪い」

つい、率直な思いが口に出た。父がそんな望に、笑みを漏らす。

「ははは、そうか？　そうかもな。おまえは本当に、母さんに似てるから」

松島が驚いたのも無理はないだろう。それほど、望とこの女性はよく似ていた。目の大きさも、鼻や唇の形も。華奢な体型までそっくりだ。

自分が髪の長いかつらをつけて、スカートをはくところなのか。案外いけるじゃん。と、望は妙な自信を持った。だが、写真に写っている女性が、自分母親だという感慨はわからない。これだけそっくりなのに、どうも他人を見ているように感じてしまうのだ。

望はゆつくりと、アルバムを捲る。アルバムのページも残り少なくなったとき、ふと手を止めた。そこに写っていた女を見て、息を飲む。

「父さん、この写真」

望が指差した写真には、白い帽子をかぶり、白いワンピースを着た女性の後姿が写っている。その女性の前方には青い空と海が広がっていた。砂浜で撮ったものだろう。

綺麗な写真だった。夏の強い日差しの中、涼しげに立つ女性の後姿が印象的だ。しかし、この写真を目にした望は、身体が震えるのを感じていた。

望の様子に気づいていないのだろう。父は嬉しげな声を上げた。

「おお、いいだろう？　この写真。父さんが撮ったんだ。デートで海に行ったときのだな」

「母さん、だよな」

尋ねると、呆れたような声が返ってきた。

「当たり前だろう？　次のページには正面から撮った写真もあるぞ」
望はその言葉に促されるように、ページを捲った。

息を飲む。白い帽子に、白い半袖のワンピースを着た母が、笑顔

で父と腕を組んでいる。

あの白い女が脳裏を掠めた。

「母さん。このワンピース凄く気に入ってな、しょっちゅうデパートに着てくるから、おまえそれしか持っていないのかって聞いたんだよ。そしたら怒る、怒る。たんに気に入ってるからよって言って、しばらく口聞いてくれなかったな……」

思い出話に花を咲かす父を遮るように、望は言った。

「この写真、貰っていい？」

父の返事を待たずに、アルバムから写真を抜き取る。立ち上がって、父にアルバムを押し付けるように渡すと、リビングを走り出た。背後から、父の声が聞こえたが、何を言っているのか聞き取れなかった。それどころではなかったのだ。

望は部屋に入ると、ドアに背をつけて写真を見詰めた。写真を持つ腕が振るえている。

「白い女だ」

そう呟く声も震えていた。

「母さんだった……」

写真に写っている母親は、いつも望の前に現れる白い女と全く同じ姿をしていた。

第七章 殺意

今日は久しぶりに、靴箱がゴミ箱代わりに使用されてなかったな。そんなことを思っていた、朝のホームルーム前。大抵、予鈴ぎりぎりに来る井上が、珍しく予鈴の十分前に教室へ入ってきた。

井上は自分の席ではなく、望の席へくると、机の上に何かを置いた。コンビニの袋のようだ。中に何かがたくさん入っている。

「おい、吾桑。貰ってきてやったぞ」

「何これ」

望の横の席に座る国立が、面白そうに眼鏡の奥の瞳を光らせる。

井上は、真面目な顔で、望を見返した。

「お守りだよ、お守り。おまえ絶対呪われてるって。あの白い女、あれはヤバイ。おまえが顔から血を流してるのを見て、ニターって笑うなんて、おかしいって。俺マジしょんべんちびりそうだったもん」

「おい、ちょっと待て、おまえまで見たのか？ 白い女」

国立が井上に詰め寄った。井上は、青白い顔で国立の腕を掴んだ。「そうなんだよ、そうなんだ。見ちゃったんだよ。吾桑の言う白い女。吾桑の上に花瓶が落ちてきたの知ってるか？」

「あ？ ああ」

井上の余りの勢いに、やや引き気味の国立である。そんな国立に、井上は、花瓶が落ちてきたときのことを、身振り手振りを交えながら、克明に語った。

興奮気味の井上の勢いに圧倒されていた国立は、井上の話が終わったとみるや、望の机の上に置かれた袋を覗き込んだ。

「で、白い女が怖いから神社めぐりしてきたわけか」

呆れたような国立の言葉に、井上が激しく首を左右に振る。

「ちげえよ。俺の母ちゃんの実家が神社でさ。爺ちゃんに頼んで、お守り分けてもらってきたんだよ」

そんな二人を見ていた望は、机の上に置かれた袋を覗いた。

「うわあ。いっぱい」

袋の中には、たくさんのお守りが入っていた。赤や、紫、紺に青、水色のお守りまである。やけにカラフルだ。コンビニの袋に入っているせいか、ありがたみがまったくない。それでも望は嬉しかった。井上が、自分を避けるのではないかと思っていたからだ。国立と違い、井上は白い女存在を否定したがっていた。

望は、袋の中からお守りを一つ取り出した。

「ねえ井上。これ、安産祈願……」

「へ？」

国立を相手に、白い女がどんなに怖かったかをまた熱弁していた井上は、気の抜けた声をだした。

「で、これは、交通安全でしょう。これは、縁結びだ」

望は一つ一つ袋に入ったお守りを取り出して、机の上に並べる。

国立が笑い声を上げた。

「おまえ、どんだけ焦ってるんだよ。ちゃんとどういいうお守りが欲しいって伝えたのか？」

安産祈願で、どうやって幽霊退けるんだ」

そう言って、腹を抱えて笑っている国立を、井上は睨んだ。また、顔が赤くなっている。

「だって、お守りはお守りだろ？ 何でもきくんじゃねえの？ つうか、そんないろんな種類あるって知らなかったし」

いい訳じみたことを言った井上に、望は笑顔に向けた。

「井上、使えないね」

望の無垢な笑顔を見た井上は、表情を氷つかせた。ショックを受けたようだ。井上はよろよると、机に縋りつくように膝を折った。望はそんな井上の様子に首を傾げた。

「おまえ、結構酷いこと言ってるぞ」

小声で、囁かれたので、望は小声で国立に返す。

「だって、縁結びならまだしも、安産祈願なんて、井上には使えな

いでしょう」

そう言つと、国立はまた口元に手をやった。

「そう言う意味か」

そう言つて笑いを堪えている。

「他に意味があるの？」

尋ねたが、国立は手を軽く横に振っただけで、答えてはくれなかった。

望は暗い闇の中にいた。

またか……。

そう思つて、辺りを見回した。

きつと、また現れるはずだ。

あの、白い女が。

望の予想通り、しばらく待つと、白い女は現れた。やはり、顔立ちは分らない。だが、よく似ている。望の持つ写真の母と。絶対に母さんだと、望は思った。

前見た夢と同じように、望の前に立つ白い女は、望の後ろを指し示した。

『また、事故の映像をみせようつて言うの』

望は初めて白い女に話しかけた。女は腕を上げた体勢のまま動かない。唇もいつものように引き結ばれたままだった。

『どうして答えてくれないの？ どうしてこんなモノ見せるんだよ。どうして事故の映像なの？ 僕は見ないよ。僕は見たくない』

望は叫ぶように言った。暗闇に声が吸い込まれる。暗闇の中に淡く光る白い女は、望の叫びをきいても動じなかった。望がもう一度口を開こうとした刹那、暗闇が動いた。物凄い風だ。望は腕で顔を庇うように手を上げ、目を瞑った。目を開けていられないほどの風だった。

不意に、風がやんだ。

雨音が聞える。

不審に思つて、ゆっくりと目を開ける。

あの場所だった。先日見たあの夢の場所。望は横断歩道の前に、立っていた。

激しい雨が、排水溝に向かって流れていく。まるで、小さな川のように。それだけ激しい雨の中にも、望の身体は濡れていなかった。腕を前に出して、掌を広げてみても、雨があたらない。

不意に、寒気を感じて望は右横を見た。白い女が、望の横に立っていた。望が口を開く前に、また女が指差した。望はつい、その方向を目で追う。白い女が指差した先に、二人の人影が見えた。一人は女性だろう。傘をさす手とは逆の手で、小さな子どもの手を引いていた。その子どもも傘をさしている。

『僕と、母さん？』

尋ねるように、白い女に顔を向けた。だが、白い女は二人の人影へ顔を向けたまま、こちらを見ようとはしなかった。望は仕方なく、また、二人の人影に目を向ける。

二人は横断歩道へ近づいてきた。二人の人影は、横断歩道の前まで来ると立ち止まった。街灯のおかげで、二人の顔が見えた。望の正面に立つ親子はやはり、写真で見た母と、小さい頃の望だった。傘をさす母の腕には、傘が一本掛けられていた。黒い傘。きつとあれは父の傘だ。

そうか、あの日。僕達は、父さんを迎えに行ったんだ。脳裏にそんな言葉が掠めた。深夜。寝ていた望は、物音で目を覚まし、傘を持っていない父を迎えに出ようとしていた母に、無理やりついていったのだ。不意に、そんな記憶が蘇った。

鈍い痛みを覚えて、望は頭に手をやった。痛みに顔を顰める望の前で、信号待ちをしている親子は、何やら楽しげに話をしている。何の話をしていたっけ？ そう、父さんの話をしていたんだ。僕

達は父さんに内緒で、駅に向かっていた。きっと、父さんは驚くよ。そんなことを言っていた気がする。

父は、まめに帰るコールを母にしていたから。父が駅に着く時間を見計らって、よく二人で父を迎えに行っていた。この日も、父が驚く顔を想像して、二人で笑っていたんだ。

ふいに音が耳を打った。信号機からの音だった。信号が青に変わったのだ。小さな望が、母の手をすり抜けて車道へ走り出る。

『だめだ。出るな』

望はそう叫んでいた。頭が痛い。だめだ、だめだ。もうすぐ。その角を曲がって車が来る。凄いスピードで。

望の叫びも虚しく、子どもはこちらへ向かって走ってくる。横断歩道の半ばに差し掛かる頃。車が、角を曲がってきた。酷い雨、街灯の少ない夜道。小さな望の姿は車に乗っている運転手からは見つからなかったのだろうか。信号を無視して、車は横断歩道に突っ込んでくる。小さな望は、車のヘッドライトに目が眩んだのか、足を止めた。

だめだ。止まるな。そのまま走れ。

『望、危ない』

女性の悲鳴に似た声が、望の名を呼んだ。

その声に顔を向けると、母が車道に飛び出してくる姿が見えた。望を突き飛ばした母の前に車が迫る。

「やめろー」

望の叫び声に、クラス中の視線が望に向いた。

望は机に突っ伏していた顔を上げて、辺りを見回した。

クラスメートが、望に奇異な視線を向けていた。ゆっくりと顔を教卓の方へ向けると、なぜか、松島先生の顔があった。

「先生。何でここに」

そういうと、驚いた顔をしていた松島は、苦笑を浮かべた。

「おいおい。さっき説明したところだぞ。もつとも。おまえは最初から寝ていたか」

その声に、教室が笑い声に包まれた。

望はその笑い声に合わせて、笑顔を作ろうとした。だが、上手く笑えない。視界が歪んだと思ったら、涙がこぼれた。

それに気づいた幾人かが、声を上げた。慌てたような先生の声も聞こえたが、どうしようもなかった。

僕のせいだった。

僕が飛び出したりしなければ、母さんは死ななかった。

僕のせいだ……僕が殺した。

きつと、母さんは僕を恨んでいるんだ。

だからこうやって、僕に辛い現実をつきつけるんだ。

第八章 最後の記憶

放課後。望は授業中に泣き出した理由を誰にも話さなかった。心配する国立と井上にも、迷惑をかけた松島先生にも。話せるはずなど、なかったのだ。

泣く資格すら、自分にはないのかもしれない。望はそう思う。今日、一体どんな顔して父と顔をあわせればよいのだろうか。

国立や井上に声をかけられる前に、学校を後にして、一人帰宅路を歩く。空は重い雲がたれこめていた。今にも雨が降り出しそうだ。まるで、望の心を反映しているかのように。

信号が赤に変わった。望は横断歩道の前で、ゆっくりと足を止める。待ってましたといわんばかりに、車が走り出した。大きなトラックが横切つて、一瞬向かい側の歩道が見えなくなった。トラックが通り過ぎる。望は向かいの歩道を見て、息を飲んだ。

先ほどまで誰もいなかった場所に、白い女が立っていた。望は白い女から目が離せずにした。

どれ位見詰めていただろうか。不意に、望は異変に気づいた。白い女の服が、まるで、雨にでもうたれたように濡れ始めたのだ。長い髪からも、水が滴っている。

信号が青に変わった。後ろに立っていた人が、歩き出さない望を怪訝そうに見てから、通り過ぎた。

それに気づいていたが、望は動き出す事が出来なかった。

白い女の顎から、水が滴り落ちた。透明な水の中に、赤い色が混じり始めた事に望は気づいた。

血だ。

血が顔を伝い落ちていく。

望は一步後退する。信号が点滅しているのが、目に入った。

その信号の下。白い女が始めて口を開いた。何か言っている。何だろう。

そう思つて、望は一步足を踏み出した。だが、良く見えない。一步。もう一步。足を踏み出した。

突如クラクションが鳴った。音の方向に顔を向けると、車が迫っていた。いつの間にか、車道に出ていたようだ。

まるで鈍器で殴られたような痛みが頭を襲った。痛みに閉じた瞼の裏に、断片的に記憶が蘇る。

瞬間、腕を強い力で引つ張られた。

クラクションを鳴らした車が、通り過ぎていく。

望は、いつの間にか歩道に尻餅をついていた。望の腕を掴んで、車道に連れ戻してくれたのはサラリーマン風の男性だった。

「何やってるんだ。危ないだろう」

怒鳴り声に目をあけて、望は顔を上向けた。

「すみません」

その一言を出すのが精一杯だった。男性は、溜息をつくとき、青にかわった信号を渡つていった。横断歩道の先に、白い女の姿はすでになかった。

ぼつりと、雨が頬にあたった。とうとう雨が降り出したのだ。あの時のように。あの事故の時のように、強い降りになるのだろうか。暗い空を見上げて、望は頭を整理しようとした。

全て、思い出した。車に轢かれそうになった瞬間。蘇ってきたすべての記憶。

会いにいかなければならない。

望は、立ち上がった。

あの人に、聞かなければならないことがあるから。

辺りはすっかり暗くなっていた。下校時間を過ぎた学校は、人氣がなく妙に静かだ。廊下を歩く音が響く。一步一步確実に進みながら、望は目的の場所へ来た。

望の目の前には、国語準備室があつた。前に一度来たことのある場所。望は前と同じようにノックする。すると以前とは違い、応答があつた。

「どうぞ。開いてるよ」

望は、失礼しますと呟いてドアを開けた。相変わらず狭く汚い部屋に、男がいた。妙に暗い。そう思つて天井を見上げると、電気がついていなかった。なぜだろう。そう思つて、そこにいた人物を見る。薄暗い室内で、窓を背にこちらに目を向けているのは、松島だつた。

松島は、望にイスに座るように促した。望はドアから一番近い席のイスをひいて、腰掛ける。最初に昼間の授業で泣いてしまったことを詫びた。それに、松島は首を横に振つた。

「いいんだよ。それより、悪いね。こんな時間になつてしまつてで、話つてなんだい」

松島が口火を切つた。とても、落ち着いた声だつた。松島は窓際から離れて、望に向き合うように棚に背を預けた。望は松島の動きを目で追つたあと、口を開く。

「前に一度、先生にお話しましたよね。白い女の話」

言つと、松島の眉が少し上がった。だが、表情を動かしたのはそれだけだつた。

「ああ、聞いたな。それがなんだい」

「ここ最近、頻繁に見るんです。その白い女。夢にまで出てきて、僕に事故のことを思い出させようとするんです」

「……」

松島は、何も言わなかつた。じつと、望に視線を注いでいる。松島の顔から、感情は読み取れなかつた。今、松島は何を考えているのだから。望の正気を疑っているのか。それとも……。

望は、言葉を続けた。

「その、白い女が僕の母親だつていったら、先生、信じますか？」

望はポケットから写真を取り出した。白いワンピース姿の女性が

写った写真。母の写真だ。ポケットに入れていたせいで、少しよれてしまった写真を、望は松島に差し出した。

松島は写真を受け取るうともせず、望から顔を背けた。溜息をつく。そして、棚から背を離し、望の前に立った。まっすぐ望を見下ろして、望の手にした写真を取り上げると机の上に放った。

「いいかげんにしなさい。君の妄想は聞くに堪えない。君が辛い経験をしたのは分かってるつもりだ。だが、そんな妄想をして何になる。現実を見なさい。白い女なんていやしない。ましてや、君のお母さんであるはずがないんだ。君のお母さんは死んでいる」

望は立ち上がった。松島と視線が近づく。望は目を逸らしたい衝動を抑えきれず、俯いた。

「そうですね。白い女は、母のことを思い出したい僕の無意識が作り出した幻影だったのかもしれませんが」

そう言つと、望より少し高い位置から松島の声が聞こえる。

「そうだ。そうだよ。すべては君の妄想だ。事故のことを知って、ナーバスになっているだけだよ。さあ、もう遅い。話はまた今度にして、もう帰りなさい」

望は、素直に頷いてドアの方へ向かう。ドアに手をかけたとき、望は松島を振り返った。

「ところで、先生」

松島が眉間に皺をよせた。まだ何かあるのか。そう言いたげに見えた。

「白い女が僕の幻影なら、今僕に見えている先生も幻影ですか？」

松島の顔が歪んだ。松島は顔に手をやって口元を覆う。

「どつという意味だ」

松島の声がいつになく低い。口元に手をやっているせいでくぐもって聞える、低い声。望はその問いに答えた。

「だって、先生は死んでいるはずだもの。僕とお母さんを轢き逃げしたのは、先生、あなただから」

「……」

「新聞には、轢き逃げ犯は自殺したって書いていあったなのに、どうして先生は生きてるんですか？」

望がそう言ったときだった。松島の背後にある窓が光った。

雷が落ちたのだ。

少し間をおいて雷鳴が轟く。

望の脳裏に、また、事故の記憶が蘇る。母を捜して起き上がった望の目に映った、男の影。稲光。その光に照らされた一瞬。焼きついた男の顔。それは、今、目の前にいる松島要一の顔だった。

松島が動いた。慌ててドアを開けようとした望の手首を掴む。かなりの力で手首をつかまれ、望はドアノブから手を離すしかなかった。

「痛っ」

望の口から声が漏れた。松島は、苦痛に歪む望の顔を見下ろした。その顔に、笑みを浮かべて。

第九章 偽りの過去

「あいつ、結局お守り持つて帰らなかった」

帰宅途中。学校からまだ、さほどの距離を歩いていない所で井上がいった。井上は手にしたコンビニの袋を持ち上げてみせる。中身はお守りだ。国立は苦笑を浮かべた。

「そりゃ、使えないからじゃねえの？」

「うるせえ。それより、吾桑の奴。何で急に泣き出したんだろう。やっぱ、白い女が原因かな。それとも、嫌がらせの方かな」

井上の問いに、国立は考えるような顔をする。

「うーん。どうだろう。あいつはああ見えて、結構強いから、アレくらいの嫌がらせなら、そうそう追い詰められるようなこともないんだけどな」

「だったら、白い女か。あれは、怖かったもんな。あいつ、ぜってえ呪われてるって。一度、爺ちゃんの家につれてってみようかな」

真面目な顔の井上に、国立は仏頂面をしてみせた。

「ずるいよな。井上。俺なんか、中学の頃から、吾桑と一緒にいるのに、白い女は一度も見たことないんだぜ。どうしておまえの前には現れるんだ。不公平だよ。俺はこんなに会いたいのに」

「俺は会いたくなく……」

言葉を途切らせて、井上が足を止めた。不審に思った国立が声をかけるが、井上は目を見開いたまま固まっている。

「おい、井上。どうした？」

国立は井上の肩に手を置いて揺さぶってみた。すると、井上は一瞬我に返ったような顔をして、国立を見ると、ゆっくりと前方を指差した。

国立は不審に思っ、その方向を見る。

数メートル先に、女が立っていた。白い、帽子に白いワンピースを着た女性だ。細身の体型。長い髪。それははっきりみえるのに、

顔立ちが分からない。

国立は寒気を覚えて、井上に顔を向ける。

「なあ、井上。もしかして、アレが白い女か？」

井上は声にならないのか、口を開閉させながら、頷いた。国立は恐怖よりも、好奇心が勝った。井上から、離れ、白い女に近づこうとした。

「おい、こら。何処行くんだよ」

震える声で呼び止められ、井上に腕を掴まれた。

「何だよ。ちよつと挨拶しようと思ったただじゃん」

「おまえは、バカか。あれは幽霊だぞ。呪われたらどうする」

井上の声が擦れている。余程怖いのだろう。国立は溜息をついた。
「大丈夫だって。呪われてるとしても、それは吾桑だから」

そう言つて、ふと思つた。なぜ、吾桑がいないのに、白い女はこの場に現れたのだろうか。もう一度白い女に視線を向ける。白い女の口が動いた。何か言っている。

「おい井上、見る。白い女が何か言ってる」

国立はじつと目を凝らした。女のゆっくりとした口の動きを読む。

『の・ぞ・む・を・た・す・け・て』

望を助けて？

「井上、見たか？ 今の」

「ああ。今、望を助けてつてそう言つてたように見えたけど」

白い女に視線を移すと、女はすつと手をあげ、ある方向を指差した。

井上と国立は同時に気づく。

その方向に、学校があることに。

大きな音が響いた。机にぶつかった勢いで、机の上に置いてあった物が床へ落ちたのだ。机に打ち付けた背が痛い。望は自分を机に

向かって振り飛ばした相手を見た。松島は酷薄な笑みを口元に宿し、ドアの鍵を閉めた。

「まったく。嫌がらせでもすれば、学校へ来なくなると思ったのにな。君は中々しぶとい。せっかくだから、君の問いに答えてあげようか」

望は目を見張った。今までの嫌がらせはすべて、松島がやったものだったのか。松島の口調はいつもと変わらなかった。だが、望の目にはまるで別人のように映っていた。松島が一步こちらへ近づいてくる。望は机を避けながら、後退さる。

「友人がいたんだよ。バカな奴だな。遊び呆けて単位を落として、留年が決まっていた」

「……」

「俺は、そいつと違ってずっと優秀だった。成績はいつもトップクラスで、就職も決まっていた」

望の足が止まった。退路がない。壁に追い詰められたのだ。そう悟ったとき、松島が望の腕を掴んだ。もう片方の手で、顎に手をかけ、顔を上向かせた。

「おまえ達が悪いんだよ。あの時、飛び出してさえ来なければ、俺は友人を殺さずにすんだ」

松島の言葉に望は目を見開いた。聞いた言葉を理解するのに、少し時間がかかる。

「つまり、先生は、友達を殺し……」

望の呟きに、松島は満足の笑みを浮かべた。望の顎から手を離し、突如、望の両脇の壁を叩いた。大きな音に身を竦めた望を楽しそうに見詰め、笑い声をあげる。

「はは、怖いかな？ 俺が。……あの時、君のせいで俺は人生を棒に振るところだった。あいつがいてくれて助かったよ。あいつは言っていた。このまま生きてたつてろくな事がないってな。だから俺は手助けしてやったんだよ。ろくな事のないあいつの人生にピリオドを打つ手助けを。俺の輝かしい未来の為に死ねるなら。あいつも本望

だろう」

つまり、自分の罪を隠すために、友人に手をかけたということか。望は松島が口を閉ざした一瞬の隙に、松島を突き飛ばした。怒りが恐怖に勝ったのだ。望の突然の動きに対処しきれなかったのか、松島は床に尻をついた。その体勢のまま、望を睨む。望は松島を睨み返した。

「そんなの、詭弁だ。先生はただの人殺しじゃないか。母さんを轢き逃げして、罪を擦り付けるために友達を殺したただけだ。先生は自分を守る為に、友達の未来を奪ったんだよ。そんなの最低だよ」

そう言って、唇を噛む。涙が出そうだった。

「あの時、母さんはまだ、生きていたのに。先生が逃げずにすぐに救急車を呼んでくれていたら、母さんは助かったかもしれないのに」
両の拳を握り締めて望は叫んでいた。

思い出していた。降りしきる雨の中。横たわった母の名を呼んで、母の手を握った。そのとき、母は弱々しく望の手を握り返してくれたのだ。あの時、母は確かに生きていた。それなのに。

「そんなことしたら、俺の人生にケチがつくじゃないか」

「え？」

「そんなこと許せない。おまえは、俺の人生を滅茶苦茶にする存在なんだ。あの時も、そして今も。白い女なんて作り話までして、俺を追い詰めて楽しいか？」

松島の顔が狂気に歪む。望はドアに向かって走った。慌てているせいで、鍵を開けるのに手間取る。鍵の開く音を耳にし、望はドアを開いた。刹那。腕をつかまれ、床に引き摺り倒される。背に痛みを感じたとき、腹に重みを感じた。松島が望の上に馬乗りになったのだ。

「やっと、結婚にこぎつけた矢先に、どうしておまえが現れるんだ。記憶喪失の振りして近づきやがって。おまえなんか、死ねばいいんだ」

松島は望の首に手をかけた。その手に力が込められる。望はもが

いた。首に巻かれた松島の指を外そうと躍起になるが、引つかこうが、何しようが、松島の手は離れない。

苦しい。息が出来ない。死にたくない。

だんだんと、意識が遠のく。松島の顔が、ぼやけてきた。

「死ね」

さらに、松島が望の首を絞める手に力を込めたときだった。

「吾桑。いるか？」

そんな声とともに、誰かが入ってきた。

松島がその声に反応した。その時、望の首を絞めていた手の力が弱まる。

「てめえ。何やってんだよ。おい、国立。誰か呼んで来い」

「分かった」

誰かがそう言つて、廊下を走つて行つたようだ。廊下を走る音が遠ざかっていく。不意に、身体が軽くなった。望の上に乗っていた松島の身体が、突き飛ばされたようだ。机にぶつかったのだろう。大きな音が近くから聞える。松島の手から開放されて、望は咳き込んだ。新鮮な空気が肺に入ってくる。それすらも、苦痛だ。

「おい、大丈夫か？ 何があつたんだよ」

心配そうな声に顔を上げてみると、井上の顔が目に入った。井上の名を呼ぼうとしたが、咳が収まらず、呼ぶ事が出来ない。井上が背中を摩ってくれる。

だいぶん咳が収まり、望は井上に礼を言おうと顔を上げた。その顔に影がかかる。井上の後に松島が立っていた。手には分厚い本を持っている。

「井上危ない」

望が声を上げたと同時に、松島がその本を井上の頭に叩きつけた。思わず目を瞑つてしまい、望は慌てて目を開いた。望の前に、井上が横たわっていた。

「い、井上」

声をかけるが、反応がない。床に重いものが、落ちる音がした。

松島が持っていた本を落としたのだ。

望は顔を上げた。松島が望を見下ろしている。

「ひどい。なんてことするんだよ」

松島は言った望の胸倉を掴み、立ち上がらせる。そして、望を殴り飛ばした。壁に肩をぶつける。口の中に血の味が広がった。壁に手を付いた。頭がふらつく。

松島はそんな望の首に、またしても手をかける。

喉を締め付けられ、また、呼吸が出来なくなった。もがきながら、松島を見た望は、目を見開いた。

その表情の変化に気づいたのか、松島が声を上げる。

「なんだ。どうした。命乞いでもしようっていうのか」

「か、かあ、さ……」

喉を締め付けられて、ほとんど声が出せなかった。

松島の背後に白い女がいた。はじめて、白い女の顔が見えた。望にそっくりの、顔立ち。写真で見た若い頃の母、そのままの姿がそこにあった。その顔が今、怒りに満ちている。

白い女の姿が消えた。

そう思った刹那。

白い女が、松島の首に腕を回していた。

ひやりとした、冷たい空気が周りを包む。

「な、何だ」

松島が、悲鳴に似た声を上げた。驚いた様に、望の首から手を離す。また、望は咳き込んだ。

松島の目は、自分の首に向いていた。その目に、白い女の腕が見えたのだろうか？咳き込みながらそう思った時、また、白い女の姿が消えた。

松島が、辺りを見回す。松島の真横に、白い女は現れた。松島の顔から血の気が引く。松島は、悲鳴をあげて、壁に背をつけた。

望の見える前で、白い女に変化が起きた。白い女の頭から、血が流れ、頬を伝い落ちていく。女の唇が動いた。

『ゆるさない……』

松島の息を飲む音が聞えた。松島は悲鳴をあげて、ドアに向かって部屋を走り出て行った。

望は力が抜けるのを感じて、床に座り込む。そして、ふと、井上が殴られたことを思い出した。慌てて倒れている井上のもとへ行く。
「井上」

呼びかけると、井上が微かに呻き声をあげた。良かった。生きてる。どうやら、気絶していただけたようだ。望がほっと息を付いたときだった。遠く、男性の長く尾を引く悲鳴が聞えた。松島の声だろうか。望の中に、不安が生まれた時。背後に冷たい空気を感じて、振り返った。

「母さん」

はじめて、白い女に向かってそう呼びかけた。すると、望によく似た女性の顔が笑顔になる。父と一緒に写っていた写真と同じような、幸せそうな笑顔だった。

「ごめんね。母さん。僕が飛び出さなかったら、母さんは死なずにすんだのに」

母の笑顔を見た瞬間、そう口走っていた。望の頬に涙が伝う。我慢できなかった。あの時、母の手を振りきって横断歩道に飛び出さなければ、事故を回避できたかもしれない。そうすれば、今も親子三人。幸せにくらせていたのに。そう思うと、涙が止まらなかった。白い女が動いた。望の前に膝をつくようにすると、望の頬に手を伸ばした。望の頬に触れている。なのに、触れられた感触はなかった。ただ、頬の辺りの空気が一気に冷えたただけだ。

『泣かないで。望』

そう、声が聞こえた。否、正確には頭の中に声が響いた。

『あなたが無事でよかった』

望は母を見る。薄く、存在感のない体。やはり、母は生きてはいない。それでも、ずっと望を心配してくれていたのだ。死んでもなお、望を見守っていてくれた。

だんだんと、母の顔や身体が薄らいできているように見えた。母は、望の頬から手を離して立ち上がる。望を見下ろして、せつない顔を見せる。母の身体は後の棚が見えるくらいに、透けていた。消えてなくなるのも時間の問題だろう。

望は涙を腕で拭くと、母に向かって笑顔を見せた。言わなければならぬ事がある。消えてしまう前に、言っておきたい事がある。「母さん。ありがとう」

そう言つて、望は母に向かって手を伸ばした。その手の先に見える母の顔が笑顔になる。望の手が母に触れる直前。母の姿は見えなくなった。

また、涙が溢れてくる。

望は床に突つ伏して、鳴き声をあげた。そんな望の耳に、廊下を走ってくる足音が聞える。誰かが来る。

終わったんだ。

なぜか望は、そう思った。

エピソード

「咲子。望を助けてくれてありがとな」

深夜。トイレに立った望は、耳に入った父の声に足を止めた。

リビングからだ。望はそつとドアの隙間から、中を覗く。ソファの上に座った父が見えた。ワイシャツ姿だ。仕事から帰ったばかりなのかもしれない。

松島に襲われた日の夜。望は収容された病院で父に話していた。白い女のこと、白い女が母だったことを。

父の前にあるテーブルの上には、お酒の入ったグラスと、写真たてが見えた。

父はその写真たてに向かって話をしているようだ。

「でも、どうせなら、望ばかりじゃなくて、俺の前にも姿を見せてくれよ。墓参りに、望を連れて行かなかったから拗ねてるのか？」

そう言っ、父はテーブルの上に置かれた写真たてを手にとった。「話したい事が、たくさんあるんだ。咲子。話したいことがたくさん……」

そう言った父の声が震えていた。声だけじゃない。その肩や背も。望はそつと、ドアを離れた。

声を掛けることはできそうもなかった。

「あー、今日もよく晴れてるな」

井上が声を上げた。松島に殴られて、一度入院した井上だったが、三日後には退院して、元気に通学していた。

松島はというと、四階と三階を繋ぐ踊り場に倒れていた。どうやら、階段から足を滑らせて落ちたらしい。病院に運ばれた松島は、警察に洗いざらい告白したそう。よほど、恐ろしかったのだろう。

昼休憩。いつもの屋上で昼食を食べ終えた望は、井上と国立と並んで屋上から、空を見上げていた。

「そついえば最近。白い女の姿、見るか？」

国立に問われて、望は首を横に振った。

「実は、あの白い女、僕の母さんだった」

唐突に望はそう言った。望は昨日まで、学校を休んでいた。だから、言いそびれていたのだ。

さぞかし驚くだろうと思っていた望だったが、二人から予想外の反応が返ってきた。

「ああ、やっぱり？ 何かそんな気がしてた」

「俺も」

望は驚いて、二人の顔を見る。井上と国立は互いに顔を見合わせた。

「だってな」

「俺たちが、あのタイミングでおまえの前に現れたのっておかしいと思わなかったか？」

望は首を傾げた。

「白い女が俺たちの前に現れて言ったんだよ。望を助けてってな。」

そのあと、俺たちを導くように、あの国語準備室まで連れて来たし」

「へえ」

望は驚きのあまり、それしか言葉にならなかった。だが、胸が温かくなるのを感じる。

「そうか。そうだったんだ」

「きつとき、おまえのこと心配だったんだろうな。だから、おまえに警告を発してた」

「でも、俺、一つ気になる事があるんだけど」

井上がそう言った。国立が顔を顰める。

「なんだよ。井上」

「花瓶が上から振ってきたときのことだよ。白い女、あっ、おまえの母親だっけ？」

「いいよ、白い女で」

望が言うと、井上は頷いた。

「白い女、おまえ見て笑ったろ？ 自分の息子が危ない目にあって笑う母親ってどうなんだよ。そんなんありか？」

そう言う井上に、国立が声を上げた。

「確か、吾桑は白い女を見て、立ち止まったんだよな」

「うん。立ち止まらなかったら、たぶん脳天直撃だったと思う」

望の答えに頷いて、国立は言った。

「そういうことだよ」

「どういうことだよ」

国立の口調を真似て、井上が問う。国立は少しずれた眼鏡を人差し指で押し上げると、井上を軽く睨んだ。

「分からん奴だな。だから、白い女は、吾桑の危険をさっちして、吾桑の前に現れたんだろ。で、花瓶が吾桑に当たらなかったのを見て、安堵して笑みを漏らした」

どうだ。と、言わんばかりの国立に、井上が鼻を鳴らした。

「はん。そんなのおまえの勝手な想像じゃねえか」

その言葉に、国立は肩を竦めた。

「確かにな」

「まあでも、僕はそう思うことにするよ」

望がそう言って顔を上へ向けた。

青く晴れ渡った空が見える。白い雲などどこにもない。青く、どこまでも青く澄んだ空。

「あーっ。吾桑。やつぱりここにいた」

金切り声が屋上のドアを開ける音とともにやってきた。

その声に、顔を向けると、クラス委員長の桐野が仁王立ちしている姿が見えた。

「ああ、桐野さんいらっしやい」

望がそう言って手を振ると、桐野は拳をつくった。

「いらっしやいじゃないわー。あんたまた、先生の話きいてなかつ

たわねー」

桐野の絶叫が屋上に響いた。

平和な日常が帰ってきた。

そう思って、望は桐野から視線をはずした。そして、また、空を見上げる。

ねえ、母さん。僕は楽しくやってるよ。母さんの見れなかった未来を、僕が変わりに見てあげる。今度会うとき、お互い笑顔でいられるように。きつと幸せに生きるから。

だから、母さん。

きつとまた逢おう。

望は空を見上げ、心の中でそっと、母に呼びかけた。

エピローグ（後書き）

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

愛田でございます。

今回の作品は、エンキド様主催の小説大会への投稿作となります。

一応投稿期日は明日までなのですが、明日から仕事でちょっと大変なので、今日投稿させていただきます。

思った以上に長くなってしまいましたが、少しでも、お気に召していただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2592e/>

白い女

2010年10月8日15時43分発行